

特264

227

徳川氏關係

史蹟石勝遊覽案内



岡崎觀光協會

始



持264
227



はし
かき

徳川家康公の地たるにも拘らず数多い岡崎の史蹟が一般に閑却せられて
居るやうに思はれます、吾々は英傑を産んだ郷土を見直したい、而して英
傑の偉業を景仰すると共に天下を風靡した三河武士の精神を甦らせたいと
考へます。

史蹟遊覽のコースは之を三つに分けました、第一日、第二日、第三日とし
て其重なる箇所由来を稍詳しく説いたものが欲しいのでした、岡崎市立
図書館長柴田顯正氏に乞ふて成つたものが本案内であります。

天竺向の略説は別に編むことにします。
史蹟遊覽については能ふ限り萬般の便宜をお圖りします。

岡崎 觀光 協會

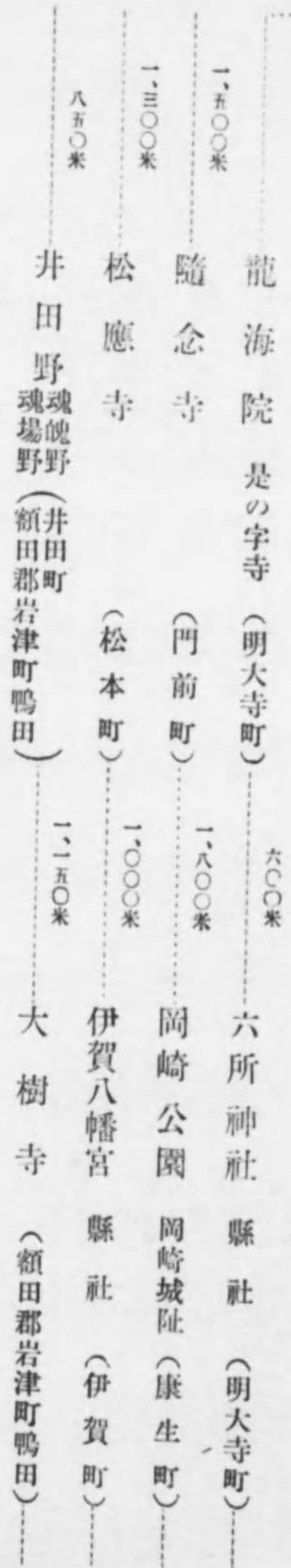
編者 識





第一日のコース

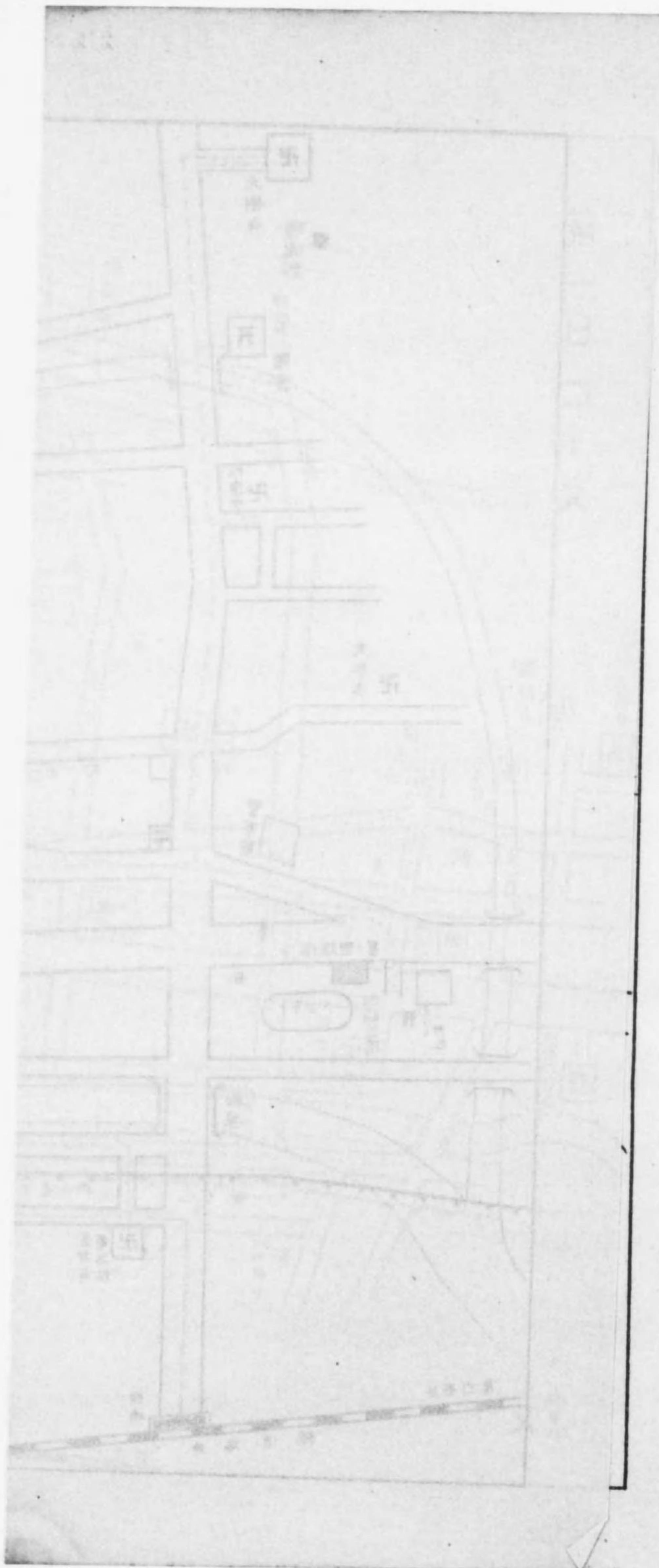
省線 岡崎驛 三、一五〇米
名鐵 東岡崎驛 二〇〇米
三鐵電車 愛電前 一五〇米



一、五〇〇米

一、三〇〇米

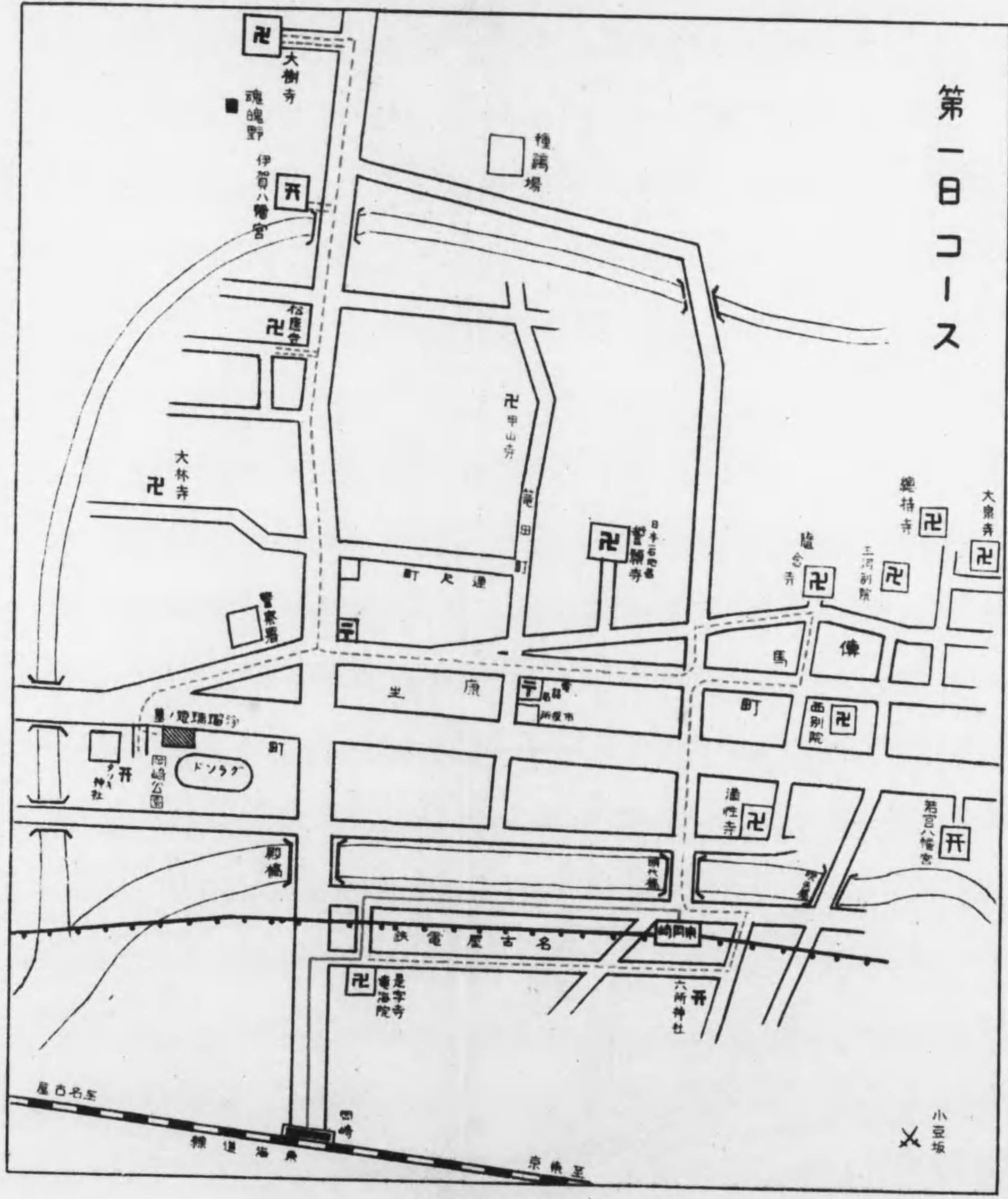
八五〇米



參考 探訪地

- 大林寺 (魚町)
- 誓願寺 (梅園町)
- 總持寺 (中町)
- 大泉寺 (中町)
- 若宮八幡宮 (若宮町)
- 滿性寺 (菅生町)
- 小豆坂古戰場 (羽根町)

第一日コース





龍海院

龍海院は、是之字寺と曰ひ、滿珠山と號す、明大寺町字西郷中三十五番地に在る。

享祿三年岡崎城主松平次郎三郎清康の家康の創立にして、模外惟俊湯美郡大久保を開山として居る。寺記に

曰ふ、享祿三年正月元旦の曉、松平清康左手の内には是の字を握ると夢見、醒て之を怪しみ、附近の相者に

命じて吉凶を占はしむれども、其意を得るものなし、時に豫て大徳の聞ある渥美郡大久保長興寺の四世模

外、輪番にて本郡大澤の龍溪院に在るを聞き、乃ち使者を遣はして之を占はしむ、模外曰く、此夢甚だ吉

なり、是の字を分析すれば日下人也、日下人を掌握するは即ち天下の主なり、天下を掌握すること公の一

世にあらざれば必ず子か孫にあらん事疑ひなしと、使者暇り報す清康大に喜び、同月四日模外を岡崎城に

招きて厚く遇し、且請じて興國開運祈願の爲め一寺を建てんと欲し、今の地を撰びて同年二月上旬工を起

し、六月下旬に至て成る、乃ち寺號を龍溪院に準じて龍海院と稱し、龍の字に因み、山の形に相擬して滿

珠山と號す、かゝる故を以て世に之を是の字寺と云ふ云々と模外天文十年十一月晦日寂。龍海院過去帳、晦日

の條に、天文十年辛丑年霜月當院開山模外惟俊和尙

大禪師とある。

同四年三月清康當院の裏門、庫藏、長屋等を建立し、翌天文元年又惣門の西脇に塔司二間を建立した。此年清康浄土宗を改め禪宗に轉じ、當山に於て師檀の契約があつた。是に於て大樹寺八代の住持寶譽之を恨み、遂に大樹寺を退き、碧海郡大濱村清淨院に潜む、よりて清康寶譽を慰し、再び大樹に飯檀せられ、當院へは酒井與四郎正親を名代として檀越に附せられた。これに依て酒井氏は累代禪宗である。天文癸巳年、達磨の像を刻し、清康より之を當院に寄進せられた。

同十二年三月清康の子廣忠、當山の鎮守として白山社を建立せられ、更に殿堂狹矮なりとて、亡父清康追善のために諸堂を改め造り、新始を七月七日に、功を十月五日に終へた。奉行は畔柳壽學であつた。

同十五年六月に、また四方勝示の黒印を賜うた。元龜二年三月晦日、廣忠の後室眞喜子戸田彈正少弼宗光(と宗光を正しとする)の女、法名花慶理 普通康光と傳ふれ、春大禪定尼慶應二年七月二日贈從一位歿し、境内に葬る。天正四年六月六日西尾城主酒井雅樂助正親卒し、又當寺に葬る。慶長六年上州厩橋城主酒井河内守重忠正親彼地に寺を建て寺號を復稱して龍海院と號した。

同八年九月十一日徳川家康より四方勝示の朱印を賜うた。

寛永元年岡崎城主本多伊勢守忠利、當山に愛宕權現を勸請した。同九年六月荒川三右衛門清次、地藏菩薩畫像を寄附す、同十年往古より當院領内に勸請ありし伊勢内外の兩宮を合併して一社となし、山下に勸請す、以來之を兩神と稱ふ。萬治二年四月二十一日岡崎城主水野監物忠善鐘樓を建立す。寛文元年十二月忠善當院領田を改む。其書に反數都合十一町九反一畝五歩、分米百廿石八升五合云々。

延寶四年八月廿九日忠善卒す法名鐵性院殿破 鐘了勘大居士同九月廿七日鐵性院殿の牌を立て、二夜三日法事を勤む、貞享四年五月忠善の子忠春、禪堂一字を建て亡父鐵性院十三の冥福を修す。元祿九年八月忠春の子忠盈、中門

並に三方の廻廊を建立し、元文二年六月鎮守社中門廻廊等を修復す、同年七月二日城主水野監物忠輝岡崎に於て卒し當寺に葬る、同五年六月十九日酒井雅樂頭忠知大阪へ行くの途、當山に立寄り、雙松院酒井の

墓に詣て和歌を献す、寶曆十三年十二月五日城主松平周防守康福山林制札を下附す、安永二年二月二日城主本多中務大輔忠肅、山林制札を書改め下附あり、天明四年十二月三日より同五日迄三日間當院開幕善徳院松平二百五十年忌法事を執行す、此時當寺の本尊華嚴佛を一般に拜覽せしめた、文化三年九月十六日大

風雨の爲め、諸堂宇屋根等大破し、山内樹木多く倒る、同五年十一月十七日山内東方高地にありし秋葉堂

始め愛宕権現と稱す、寛永元年本多伊勢守建立の堂宇也。を門前に移す、天保六年十月廿九日酒井雅樂頭當院に參詣あり、近邊末寺六ヶ寺へ目見金百疋宛與へらる、其後諸堂宇火災に罹りて烏有に成し、残りしは、鐘樓、門、鎮守堂、秋葉堂等のみなり、天保十三年再建した。

本尊は木造釋迦如來坐像松平清康の寄附佛である。

現今の堂宇には、本堂、開山堂、位牌堂、玄關、庫裏、書院、土藏、鐘樓、浴室、地藏堂、觀音堂、惣門、鎮守堂、秋葉堂等があり、末寺には大泉寺中極樂寺同寶福寺梅岡町觀音寺能見總持寺籠田保福寺古井眞成寺、幡豆郡最明寺幡豆郡般若寺湊美郡寶林寺同郡永福寺同善福寺同圓滿寺同空印寺小濱八幡町等がある。

寶物

- 佛舍利(酒井讚岐守家臣小泉文左衛門寄附) 一體
- 正觀世音菩薩木立像(行基菩薩作) 全
- 地藏菩薩木立像(祐天上人作) 一衣
- 袈裟(二十五條衣開山模外の傳衣) 一部
- 法華經寫(紺紙金泥筆者不詳)

松平清康畫像 一幅

徳川家康畫像(徳川家康公より拜領) 全

水野忠善畫像(水野監物自傳) 全

後深草院眞翰 全

龍海院由緒記(撰者不詳水野忠善與書) 一軸

同(山城國宇治興聖寺様芳撰) 一軸

舍利記(大乘寺山和尚撰) 一通

位記(慶應二年七月二日東照宮繼母藤原眞喜子法号天芳院贈從一位宣下) 全

松平廣忠寄進狀(天文十五年六月) 全

山林制札(水野忠善筆) 一枚

是字寺額(慶長八年九月十一日於伏見城拜領) 全

興國城額(酒井忠以筆) 全

鎮守堂棟札(松平廣忠筆)

寺記本文にしるせる如く、墓地に家康の繼母戸田氏眞喜子花慶理春大禪定尼の墓があり、酒井雅樂助正親の墓碑あり、銘は寶永六年林信篤鳳の識す所である。尙正親以前の雅樂頭家祖先の墳墓もある。

六所神社

六

六所神社は、明大寺町字耳取四十四番地に鎮座。

當社は徳川家康の産土神にして、徳川氏歴代の崇敬ありし社である。

社記によれば、人皇三十八代齊明天皇の御宇、勅願に依て、奥州塩竈六所大明神を勸請し、桓武天皇の御代、田村將軍東夷征伐之時、祈願を籠め、又新田義貞矢作合戦の時、願文を納む等の由を載すれど、徳川氏即ち松平氏の産土神としての崇敬は、松平初代親氏より始まれる東加茂郡六所明神に對する信仰の、松平氏の勢力發展に伴うて、此地の六所明神に移りしものと見るべきである。彼の有名なる加茂六所神社の奉加帳に、抑當社大明神者、當國鎮守の靈廟郡村加護の明神也、就中松平一黨之氏神、先祖崇敬之靈社也とあり、此奉加帳は、大永七年十二月に社殿の回祿せるを再興せんとするものにして、最後に、百疋道闕五百疋祐泉とありて、道闕は五代長親、祐泉は六代信忠にして、東照公の祖父清康の岡崎城に在る時のものである。而して此岡崎の六所明神の天正十六年九月の文書に、明大寺六所大明神、殿様御氏神に候處云

々と云ひ、寛永十一年の朱印狀に、參河國六所大明神者東照大權現有降誕地之靈神也、是以崇敬異他とありて、兩社の間に連絡があり、推移の跡を明に窺ひ知らるゝやうに思はるゝ。而して明大寺の六所神社の顯れ來りしは、清康の岡崎在城の時頃では無からうか、特に東照公誕生の際は、産土神として拜禮があつたと云ふ、そは由緒に、天文十一年十二月廿六日、於岡崎御城竹千代君様御誕生、日を経て高宮へ御參詣、御産土神之御拜禮御規式被爲在云々とするしてある。然るに尾藩の天野信景の鹽尻に「六所明神はじめ松平の郷にあり親氏公奥州に在館の時鹽竈六所の明神に祈りたまひ御家門再興ありし後に、松平の御館六所の神をまつりたまへり、大神君の御時松平より此地に遷座ありて社をたてたまへり云々」また岡崎城主古記に「永祿元戊午年岡崎城南妙大寺の村へ六所大明神の社御造營あり」參河見聞集に「三州加茂郡松平の鬼門宮口村蜂ヶ峯塩竈六所大明神を人皇第七代正親町院の御宇永祿元戊午年同國額田郡妙大寺村の山へ遷す」とありて、家康の永祿元年に妙大寺に遷したるやうにしるせるは甚だ疑問である。

永祿元年は、家康いまだ元康と稱して駿府に在る時であるが、この年の二月五日に、初陣として寺部城を攻め、更に梅ヶ坪、舉母、廣瀬、伊保等の地に軍を出して居る、もし永祿元年の勸請とすれば此際に遷し

七

たものと見なければならぬ、然らば山緒書に云ふ、家康の誕生當時參詣して産土神としての禮拜があつた由と全く合はぬ事となる、或は社領寄進か、社殿修造の事などを誤つたものでは無からうか、暫く疑を存し置く。

慶長七年六月徳川家康社領六十二石七斗の朱印を附し、同九年八月社殿の造營を行はる。寛永十一年家光將軍上洛の時、岡崎城に於て本社を遙拜せられ、松平伊豆守信綱を名代として社參せしめ、百石の社領を寄附し、次で岡崎城主本多伊勢守忠利を奉行として社殿を改築せらる、寛文二年家綱將軍金千兩を寄せて社殿の修復を命じ、元祿元年綱吉將軍、岡崎城主水野右衛門大夫忠春を奉行としてまた修復を行はしむ。尙其後も屢々信復の事享保十三年、寶曆六年、寛政十一年、文化四年があつた。文化九年、天保十一年、嘉永七年、慶應三年

明治五年十月十二日、村社に列せられ、同四十三年七月九日同町字天白前鎮座の村社天白神社祭神 瀬織津姫命 同町字下郷中鎮座の村社朝日神社祭神 伊非冊命、天無格社津島社祭神 須 同町字栗林鎮座の無格社事比羅社祭神 金山彦命、同町字向山鎮座の無格社稻荷社祭神 豐及 及び境内神社八幡社祭神 天白社祭神 瀬白山社祭神 菊山彦命 高宮社祭神 高宮若御子三河國內神明帳に、初の位高 先驅社祭神 不詳 を本社に合祀し、高宮神社と改稱す。

大正九年十月廿二日縣社に列せられ、同十一年十月七日更に六所神社と改めた。

祭神は猿田彦命、塩土老翁、事勝國勝長狹命、衝立船戸神、大田神、瀬織津姫命、伊非冊命、天照大神、天鈿女命、須佐之男命、金山彦命、豐受大神、應神天皇、菊理比賣命、高宮若御子の十五柱である。

現在の建造物には、神殿、幣殿、拜殿、社務所、土藏、樓門、祭器庫、石鳥居、手水鉢、井戸屋形、石燈籠六高麗狗二社標、制札等がある。

例祭は十月十三日、十四日もとは九日である。

寶物

太刀	近江守藤原繼廣作 神社傳來	一振
刀	古備前包平作 舊岡崎藩士奉納	一振
刀	飛彈守藤原作 針谷重懋奉納	一振
槍穂先	康道作、村正作、越前國 下内繼利作神社傳來	三振

棟札

慶長九年八月家康卿
寛文三年三月家綱公
享保十三年三月吉宗公

寛永十三年八月家光公
元禄元年十二月綱吉公
寶曆六年八月家重公
六枚

祭日には神輿の渡御あり、射的もとは早朝城主より神馬一疋を曳く例であつた。
昭和十年五月

樓門、御供所、拜殿、幣殿神殿共に國寶建造物に指定せらる。
耳取繩手

六所神社の一の鳥居を出ると東西に通ずる道路の西方を耳取繩手と呼びをのかみは全くの繩手道であつた、家康の父廣忠の叔父なる松平藏人信孝が廣忠に叛いて岡崎城を攻取らんとして、こゝに酒井正親石川清兼や大久保新十郎忠俊、同五郎右衛門忠勝等と戦つて討死を遂げたる所である。時は、天文十七年四月十五日の事であつた、信孝の墓は碧海郡六ツ美村上和田省線停車場の西淨珠院に在る。

隨念寺

善徳院と云ひ佛現山と號す。門前町九十一番地に在り。大樹寺の末寺である。

開山は大樹寺第十五世磨譽魯聞上人慶長五年二月廿三日寂にして永祿五年七月徳川家康の創立に係る。始め家康の祖

父清康三河を一統し、更に進んで尾張を略せんとし、天文四年十二月五日同國守山の陣中に於て變死した年僅に二十五、岡崎の將士清康の遺骸を奉じて惜々として軍を引く、三河では之を守山くづれと稱した、

かくてその遺骸を菅生丸山即ちこの寺地に茶毘し、遺骨を納めて墓を建てた、善徳院墓碑則ちこれである。諸國御

菩提所覺書には「善徳院殿年叟道甫大居士、世良田次郎三郎清康公、天文四乙未十二月五日尾州森山にて御逝去、當寺に御火葬爲し奉り御遺骨を大樹寺に収め奉る當寺隨念寺にも御骨を分ち奉りぬ」と記し、大林寺

記には「大林寺は西郷氏代々の菩提所なれば清康君始め同夫人西郷昌安入道女春姫同所に葬る」とあるが恐らく茶毘の後大樹寺、大林寺共に分骨したものであらう。

後、永祿四年八月二日家康の大叔母久子岡崎城中に歿す、遺言に因りてまた此地に火葬し遺骨を清康の墓側に納む。法名を常在院桂室泰榮大姉と號し、後、隨念院殿と改稱した、久子は清康の妹恐く姉であらうなれど

も養女として初め松平原次郎乗勝に嫁し、大永四年十一月乗勝卒するに及びて岡崎に歸り翌五年十二月足

助の城主鈴木雅樂助重政の嫡子越後守重直に再嫁す、然れども清康歿後、鈴木氏松平家に叛くを以て久子また岡崎に歸る。而して家康が三歳にして生母に別れし後は全くこの久子の手によりて撫育せられたものである。

久子の歿するや、家康菅生の人本間次郎入道覺榮をして岡崎城中久子の寢室と倉庫とを此地に移し、以て大樹寺の慶譽魯聞を請じ清康及び久子菩提の爲に梵宇を建立した、これ即ち當寺の創基である。

次で清康の畫像及び彌陀三尊の畫像等を納め且つ一向宗乱後、土呂村善秀寺を破却するや、倉橋總三郎久勝をして彼寺の什物、五部の要文、須彌と金柱とを、また長澤村立信寺の佛具等を寄附し、又諸堂を増築し、これより伽藍宏壯となつた、永祿九年十二月境内の寄進狀を賜ひ、天正三年二月八日また寺領を寄附し、慶長八年八月二十日朱印五十石を賜うた、元和五年將軍秀忠本堂修理を加へ山門を創建し、新に梵鐘を懸けた。

もと塔中に常福院、魯方院、攝取院、授徳院があり、何れも永祿年中徳川家康の創建に係りしが、授徳院は早く斷絶して明治時代まで残りしは三ヶ院であつたが、魯方院、攝取院は既に明治六年二月取拂はれ堂

宇の現存するは常福院のみである。

本尊は木造阿彌陀如來坐像、春日の作、建造物には、本堂、庫裏、玄關、書院、鎮守堂、山門、總門があり、もと觀音堂永祿五年徳川家康の創建、本尊如意輪觀音坐ありしが大正七年燒失した。

寶物

- 家康公寺領寄附判物 永祿九年同十三年 三通
- 天正三年
- 清康公是之字瑞夢吉例眞影 永祿五年 一幅
- 家康寄附
- 彌陀三尊畫像 惠心筆永祿五年七月 一幅
- 家康寄附
- 六字名號 圓光大師筆永祿五年 一幅
- 八月開山慶譽寄附
- 開山慶譽上人影像 一幅
- 家康公外十六將影像 一幅
- 徳川家綱公書 一幅
- 延喜御時屏風歌 栗田青蓮院宮二品 一幅
- 尊眞法親王筆 一幅

葡萄之畫

本多忠典筆

淨土三部經

連尺町太田利重一子十念寫
享保十四年十一月同人寄附

群盲圖畫

月惚筆
寛政五年七月

善導大師五部九卷

永祿五年七月
家康寄附

須彌壇

金朱香宮 德川家康寄附

御靈屋莊嚴柱 全 上

總門戸扉 全 上

三奏紋板 德川家康自刻永祿五年
七月家康寄附

長 刀 武藏寺永道作永祿五年
七月家康寄附

雲版 三州長澤立信寺常什永正戊刀七月日施主妙選
と銘し、裏に従家康公襟被下置隨念寺摩譽代
と刻す、因に永正戊刀は永正十五年なり

本玉水晶珠數 慶長十五年家康寄附

蜀紅錦座具 全 上

一幅

七卷

一卷

九册

一個

一個

二本

二枚

一枚

一振

一面

一連

一敷

道具 衣 全 上

街立 畫、岡山應舉筆
倫譽上人寄附

一衣
一基

清康の畫像即ち是之字瑞夢吉例眞影は神采奕々犯すべからざる氣品がある。眞に仰ぐべき尊ぶべきである。本堂の西方石礎高き所に清康並に久子の墓がある。石燈籠二基墓前にあり、左側に在る向つて右燈籠に善徳院殿御廟、前右側に在る向つて左燈籠に隨念院殿御廟前とする。即ち西方

岡崎公園 (岡崎城址)

石壘高く聳えて古松老杉或は榎樺の翠碧天を摩し、壘下に梅林の清香を送るあり、櫻は綠樹の間に雲と棚引き、楓葉は濛に臨んで錦を飾る。西には矢作の川の洋々たるを控へ、南に菅生の清流を瞰し遠く眸を放てば浩茫たる参尾の平野を隔て、濃勢の連山の依稀たるを望み、左手には重疊の巒峯障壁を劃し、雄大の風光得難き眺である。

此地もと稻前神明宮の鎮りまし、天神山の一部にして龍頭山とも稱へた。

その昔三河の守護職仁木京大夫義長の日代（守護代）たりし西郷氏が彈正左衛門調頼の時菅生河南岸の壘に住み、更に後土御門天皇の享徳元年（一三二二）より此の地に城壁を築き康正元年（一三二五）に至つて成り實に四ヶ年の星霜を費した。龍ヶ城また岡崎城と呼んだ。西方には矢作川の流深く入つて渚洲をなし、南には男川の水東より來つて矢作川と合し、城地はこの先端に在つて甚だ要害の所である。

調頼入道して清海と號す、今も城西また城北に清海堀の名を存して居る、調頼の子頼嗣、この時北方加茂の松平村より起れる松平氏が親氏、泰親を経て三代和泉守信光（東照公七世の祖）の時に至り額田郡岩津に城を築いて南下の勢を示す。是に於て頼嗣は信光の五男紀伊守光重を養ひて岡崎城を讓る、光重の子岡崎左馬允親貞その弟信貞（實は頼嗣の子と云ふ）に家を嗣しむ。信貞彈正左衛門と呼び入道して昌安と號す更に土木を興して城郭を宏壯にした。大永五年五月安祥城主世良田次郎三郎清康（東照公の祖父）に岡崎を讓り、菅生川南岸の壘に退隱す、これより岡崎城は松平氏の根據地となる、清康この城に在つて三河を一統したれど年僅に廿五にて不幸尾張守山に於て不測の害に遭ひその子廣忠十歳にして諸國を流浪すると三年、漸く岡崎城に入りたれど西は織田氏に東は今川氏に壓迫せられ、また僅に廿四にして害に遭うた

廣忠の子が即ち家康である。

天文十一年十二月二十六日城内坂谷の邸に呱呱の聲を揚ぐ、産湯の井園内の西方にある。

家康幼名竹千代、六才の時駿府の今川氏に質たらんとし途に奪はれて尾張の織田氏の手に落つ。天文十八年三月廣忠歿し、岡崎城主なしよつて今川義元、家臣山田新右衛門、田中次郎右衛門を城代とし（後に三浦、飯尾の二將と交代した）鳥居伊賀守忠吉、阿部大藏定吉等奉行となる。後には石川安藝守忠成（後に清兼）青木越後守重道、酒井雅樂助政家（後に政親）酒井左衛門尉忠次、天野清左衛門康親、榊原孫七長政、奉行として幼君の留守を守つた。

永祿三年五月十九日今川義元桶狭間に戦死す。大高城を守りし東照公は兵を引いて大樹寺に入り、今川氏の城代の退散するを待ちてやがて岡崎城に入る。歳正に十九。時は實に五月の廿三日であつた。

家康入城後、更に城郭門樓を經營する所多く、世に東照公の細張と稱へた。
永祿八年三月三河一國平定するに及び、本多作左衛門重次、天野三郎兵衛康景、高力與左衛門清長を奉行とし、國內の事を執行せしめた。元龜元年家康の濱松に移るや、嫡男岡崎三郎信康此城に治す。天正七年

信康遠州二股城に自殺せる後石川伯耆守數正城代となり、天正十三年小牧戦後本多作左衛門重次之を守つた。天正十八年小田原陣の時豊太閤の命により吉川廣家一万五千の兵を以て此城を守衛した。東照公封を關東に移すに至り、江州八幡の城主田中兵部大輔吉政入城し、西尾城を兼帯して十萬石を食んだ。天正十九年より文祿二年にわたりて盛に層樓門閣を起した、外廓に田中堀の名を存じて居る。東海道を北に轉じて城下を通ぜしめたのも此時である。

慶長五年關ヶ原戦後、本多豊後守康重城主となり、五萬石を食み豊後守康紀、伊勢守忠利に至るまで在城した。正保二年水野監物忠善、吉田（豊橋）より來り、右衛門大夫忠春、豊前守忠盈、和泉守忠之忠之は、

年九月八代將軍吉宗の老中となり、享保十年十月十八日六萬石を食む嗣來水野氏は六萬石 監物忠輝、監物忠辰、和泉守忠住に傳へた。寶曆十二年に至り、

松平周防守康福古河城より遷り五萬石。然るに在城僅に八年明和六年濱田城に轉じ濱田城主本多中務大輔忠肅代つて入城し五萬石を食み、中務大輔忠典同忠顯同忠考同忠民同忠直に傳へて明治維新に入つた。

明治四年廢藩置縣の際額田縣を置き縣廳を二ノ丸城主屋敷に置く翌年廢廳

明治六年より同七年に至り舊藩主本多家より舊郭内地の寄附を受け、同年九月元三河教校跡敷地もと二ノ丸の地

を公園敷地として大正八年八月十二日に地種の組替を終へ、附近の個人所有の宅地全部も八年度より十年度に及んで買収並に移轉を了した。愛知縣よりは八年度より五箇年にわたつて公園整理改造費の補助を下したれば、ます／＼良公園たる風致を發揮するに至つた。

本丸跡に縣社龍城神社あり、辰巳櫓のありし所に巽閣あり、二の丸跡に市立圖書館を建て、菅生川の北方舊侍屋敷のありし地に運動場を設くる等公園としての施設が着々行はれて居る。

大正天皇の東宮におはしたる明治四十三年十一月十九日岡崎に行啓あらせられ天主閣臺上に成らせられ展望あらせられた。

昭和二年、尾三の平野に舉行せられたる昭和第一回の大演習を御統監あらせられたる 天皇陛下は十一月二十一日岡崎市に行幸、午前十時二十分公園に着御天守閣臺上に御登臨あらせられた。

東照公産湯井

本文に記せる如く岡崎三郎廣忠を父とし刈谷城主水野右衛門大夫忠政の女お大の方のちの傳通院を母として坂谷の邸に誕生したる家康は幼名竹千代酒井雅樂助正親當時政家胞刀の役石川安藝守清兼當時忠成墓目の役を勤めた誰

か想はんこの兒長じて雲蒸龍變、遂に江戸に幕府を開き十五代の覇權を樹立するに至らんとは。

二〇

龍城神社

祭神は徳川家康公と本多忠勝朝臣の二柱、東照宮と映世神社を合併したるものにして、東照宮の創建の年代は明ならざれど三代將軍家光が日光靈廟の造營を行ひ、東照大権現の信仰が全國に及びたる頃、特に譜代大名の岡崎城主としては當然由緒深き當城内に奉齋すべきであるから恐らく寛永年代の創立と思はるゝ。映世神社は忠勝の嗣子美濃守忠政が姫路城本丸内に父忠勝朝臣の靈を祀り、爾來移封毎に必ず城内に之を祀つた。明和七年本多中務大輔忠肅の石州濱田より岡崎に轉ずるや東照宮を三ノ丸に移し、當社を本丸内坂谷葺櫓の傍に建て佛刹歡城院を以て東照宮と共に別當職たらしめた。明治維新後東照宮を移して合併の上明治九年一月龍城神社と改稱し現今の地に移轉した。明治十三年八月當社の改築に従ひ、同年十月廿二日東照宮と復舊し同十四年十月九日神殿、玉垣、神門、鳥居等を建設し、明治十六年十一月更に篤志者の寄附を募りて拜殿その他の全功を圖る。同廿三年十二月廿六日家康公降誕三百五十年祭を執行し、同四十

五年四月廿六日社號を龍城神社と復舊す。大正元年十月忠勝十七世孫子爵本多忠敬社殿營繕費として金壹萬圓寄附あり、同年新築工事に着手し翌二年十二月本殿、幣殿、拜殿、神饌所、社務所、高麗狗、石燈籠石鳥居等の建造落成す。

同三年四月八日縣社に例せられ同月廿二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

列祭は四月十六日、十七日である、十七日に神輿は大名武者行列の古禮を以て岡崎市中の渡御がある。

寶物

徳川家康公木座像 (傳曰天海僧正作)
(廣忠寺寄附)

一體

徳川家康公畫像

一幅

東照宮神號 (前大僧正實觀筆)

東照宮神號 (本多美濃守忠民筆)

徳川家康公書翰

徳川家康公陣羽織

徳川家康公朋服

松平家大系圖

田町市免許狀 (慶長十四年九月十
七日家康花押)

同 副書

本多忠勝公畫像

映世明神神號 (神道長卜部良連筆)

本多忠勝公社禊

御旗

轡

蜻蛉剪槍圖

神鏡

古文書類

歎城院古例書

公儀御祈禱用一件

歎城院圖面

新御社定記

分限帳

公儀御祈禱御札認書

歎城院雜記錄

新御社へ出勤の次第

正遷宮御神忌並法則

歎城院由緒記

明大寺合戦記

東照公遺訓碑

東照公の遺訓碑が本丸趾松樹の下に建つのである、その高さ七尺五寸幅三尺五寸の壯大なるものである、
篆額が徳川家達公の筆遺訓が徳川達孝伯の筆になつて居る。

遺訓は

人の一生は重荷を負て遠き道をゆくか如し いそくへからず 不自由を常とおもへは不足なし 心に望
おこらは困窮したる時を思ひ出すへし 堪忍は無事長久の基 いかりは敵とおもへ 勝事はかり知てまく
る事をしらすは害其身にいたる おのれを責て人をせむるな 及さるは過たるよりまされり

六本榎

舊岡崎城大手門の外に在つた今の警察署の西横手に當る六本の榎の立聳えたるよりいふ名である今も二
柱ばかり昔の名残をとめて居る。こゝに岡崎城主本多豊後守康紀の時腰元おふく草履取龜藏と通じた

るため兩人をこの榎の一株に搦め置き痛め苦しめたるより搦められたる一株の榎はいく度植ゑ代へても必ず枯ると傳へて居る。

松 應 寺

瑞雲院と曰ひ、能見山と號す、松本町四十二番地に在り京都知恩院の末寺である。

開山は重蓮社隣譽月光和尚元龜三年七月八日寂にして永祿三年に徳川家康が父廣忠菩提の爲に創立せられたものである。

文祿四年十月十一日岡崎城主田中兵部大輔吉政寺廻り畠の寄進があり、慶長七年六月十四日徳川家康朱印百石を賜うた。同十年廣忠五十七回忌に廟所、松石垣、玉垣、鳥居、拜殿、門並に靈屋、本堂等の建立があつた。棟札寫に奉行三浦勝兵衛直正、材木方洞意入道、菅沼伊賀守、受學入道、彦坂九兵衛、淺井金右衛門、三宅岩木、右者當國風來寺河井檀度山より材木出御役人也、御手傳岡崎城主本多豊後守五万石、西尾城主本多縫殿助二万石とある。

同十七年正月廿六日に徳川家康の參詣があり、元和九年二代將軍秀忠、三代將軍家光の參詣があり、寛永十年家光佛殿、御廟、方丈、鐘樓、三門山等の造營があつた、奉行は松平右衛門大夫正綱であつた。其後万治三年、天和三年、元祿十年等の修葺があつた。

寛永十一年三月廿七日常紫衣を賜ひ黄金十枚並に江戸より京都迄上下人足傳馬を下された。慶應元年閏五月九日將軍家茂參詣があつた。

本尊は木造阿彌陀如來坐像聖德太子作と傳ふである。現今の堂宇に本堂、御靈屋、方丈、鐘樓、庫裏、太子堂、三門山等がある。梵鐘銘は天和三年十二月十七日。

御靈屋には成烈院殿廣忠法號嘉永元年十月十九日勅證及び東照宮の位牌を奉安してある。

御廟なる家康公手植の松は老朽して僅に其枯根を留るのみであるが今は二代目の松、枝を張りて繁茂して居る、大正元年其西方に又新松が発生した。

天正十八年三月十日廣忠岩崎八彌の爲に害せらる、年僅に二十四當時竹千代家康の幼名質として駿府に赴く途中奪はれて敵なる織田彈正忠信秀の手にわたり、熱田の加藤圖書順盛のふの家に幽せられて居る。岡崎將士の

悲痛想ふべしである、されば喪を秘して遺骸をまづ大林寺薬師堂に入れ更に能見原隣譽月光庵の前に於て茶毘に附した。今川義元の將大原雪齋並に朝比奈備中守泰能等岡崎城に入り岡崎の將士と共に安祥城の攻撃を開始し安祥城は天文九年六月六日遂に十一月九日之を陥れ守將織田三郎五郎信廣信長の庶兄を生擒しこれとに織田信秀の爲に奪はれた竹千代とを交換し、竹千代やうやく岡崎に歸り十一月十二日に父の墓前に額づいて涙にくれた、時に竹千代僅に八歳、やがて小松一株を植ゑて念じていふ松平の家興らんに此松長じて榮ゆべしと、果して松の枝葉ますく繁榮し松平氏は徳川氏となつて家康は遂に征夷大將軍となつた。

寶物

- 屋敷並烟寄進狀 文祿四年田中吉政 一通
- 傳馬朱印 慶長十一年 一通
- 人馬朱印 慶長十六年 一通
- 人馬朱印 慶安三年 一通
- 常紫衣繪旨 寛永十一年三月廿七日 一通
- 釋尊畫像 徳川家康寄附 一幅

- 羅漢畫像 徳川家康寄附 四幅
- 涅槃畫像 傳、行基筆 一幅
- 當麻曼陀羅 傳、惠心筆 一幅
- 開山月光畫像 自筆 一幅
- 徳川御年譜 徳川義直寄附 一册
- 起立記 學譽默然撰 一卷
- 靈松祈願疏 寛永十一年學譽默然筆 一卷
- 朽之記 學譽默然撰 一卷
- 阿彌陀如來木坐像 傳、聖德太子作 一體
- 地藏尊木立像 傳、行基作 一體
- 朱塗木盃 松平廣忠遺具 三箇
- 堆朱香宮 徳川家康寄附 一箇
- 太刀 吉光銘 松平廣忠遺具 徳川家康寄附 一振
- 鞍 明治廿三年四月於本縣議事堂供天覽 松平廣忠遺具 徳川家康寄附 一脊

もと當時の塔中に善入院、宗慶院、林塔庵、傳宗庵、淨誓院、西光院、貞照院、存了庵の八字ありしが善入院、淨誓院、西光院を除く外は其跡絶えて久しく今に於ては事跡の見るべきものが無い、西光院は梅築山と號し築山殿徳川信康の母天正七年八月廿九日生菩提の爲め本多豊後守廣孝の弟廣信文祿六年九月廿九日歿大徳の建立せるものにして、明治維新後尾州中島郡稻澤町に移轉したもと福壽町地藏の傍に榎の大木ありて築山殿の墓驗なりと傳へて居つた。

伊賀八幡宮

伊賀八幡宮は伊賀町字南郷中寺番、同廿七番地に鎮座、文明年中松平親忠の創立である。
社記に曰ふ、後土御門天皇の文明年中或は云ふ三河國井賀の郷和名類聚鈔に位賀の郷あり之を以ても古き郷名なるを知らるに伊賀八幡宮は初めて鎮座があつた。實に三河前四代即ち家康六代の祖に當る松平右京亮親忠の勸請しまつりたるものである。

親忠の父なる和泉守信光は、岩津城に住み安祥城を攻めて之を陥れ、五男光重を岡崎城に在る西郷彈正左衛門頼嗣の女に養嗣たらしめ、勇を遠近に振うた。

親忠に及んで安祥城に移り、岩津岡崎の中間にある井賀の地をトし、我が氏神として、武運長久子孫繁榮を祈願せん爲め、八幡宮を齋き祀り、伊賀八幡宮と號した。之より所の名をも伊賀と改めた。

五代長親、六代信忠、又常に崇敬を怠らず、七代清康に至りて、岡崎城に移り、南征北伐、三河の統一に努めたれば、更に社殿を造營し、弓箭を献じ、出陣毎に必ず祈願を籠めた。

天文四年の十二月五日、清康の尾張守山の陣中に於て不測の難に遭ふや、織田彈正忠信秀、大軍を率ゐて三河に侵入し來り、此月の十二日、大樹寺表に陣を立て、岡崎城を一揆に揉落さんとす。清康の子廣忠、時に年漸く十歳、更に内訌あるありて、岡崎家人の憂懼言ふばかりなし、さりとして代々の所領を敵の馬蹄に委し何の面目あるべきと、總勢僅に八百餘人、岡崎城を出で、常例のまゝに伊賀八幡宮の社前に丹誠を致して祈願し、やがて伊田の原に駆け出て、激戦數合、折しも不思議なる哉伊賀八幡宮の社頭俄に鳴動し一の鳥居一間ばかり北に動き、白羽の矢敵中に降ること雨の如く、敵の軍勢を向くべくもあらで、散々に

敗北し、尾張の國へ逃歸つた。

此の戦の最中に、蘆毛の馬に跨りたる武者一騎、其の様凡人と思はれざるが、味方の眞先驅けて敵中に攻め入るを見たとき、之より伊賀の郷にては蘆毛の馬に乗ることを忌んだ。

この不思議の事實は、大久保彦左衛門のしるせる参河物語にも、家忠日記にも、其他参河松平氏の歴史記録にも悉く載せて居る。

此時の白羽の神矢は、永く子孫まで神威を崇仰せしめん爲とて廣忠より二筋を神社へ奉納した。

清康の叔父なる松平内膳正信定の、廣忠を逐ひて岡崎城に入るや、岡崎の家人等の我に叛心を抱くを見て伊賀八幡宮の社頭に於て、誓書血判を爲さしめたる事があつた、されど神は非禮を享け給はず、信定程なく没落し、廣忠再び岡崎城に入つた。

天文十一年十二月、家康岡崎城に生誕あり、氏神としての尊崇愈々厚く、初陣の際當社に祈りて勝利を得られしより、吉例として大事の戦毎に必ず参り詣でられた。

永祿九年家康二十五歳の時社頭を造營し社領を上り、神殿の戸帳に其の姓名を自筆して、献納した。此年

家康は、徳川氏を稱する事の勅許を受け、併せて従五位下参河守に任ぜられたれば、その報賽の爲め造營献納に及んだものであらう。

慶長五年、關ヶ原合戦の時、社殿鳴動し、物の具の音夥しく聞え、一の鳥居西の方に歩み寄る、家康神威を畏み、慶長七年八月社領二百二十八石餘を加増し、後陽成天皇の御神號宸筆を奉納し、同十六年に至り社殿の建造を命じた。

元和元年大阪陣の時、一の鳥居また西の方へ動き、家康靈夢を蒙れるを以て、祠官柴田刑部少輔正勝を召して、更に社領二百一十一石餘を進献し、本殿屋根葺替の料として金百兩を奉つた。

寛永十一年三代家光將軍上洛の際、老中松平伊豆守信綱を代拜として社参せしめ、寛永十三年社領百石を加増して都合五百四十石として、岡崎城主本多伊勢守忠利を奉行として社殿造營を行はしめ、併せて相殿に東照宮を勧請せしめた。

寛永十四年の冬、一の鳥居西の方に動き寄る。人々不思議の思を爲したりしが、果して鳥原の變が起つた。是に於て愈々靈威の灼然なるに驚いたと云ふ。

慶應元年閏五月五日徳川氏茂上洛の際社参した、當時徳川氏の武威漸く地に墜ちたりしが、猶その雄壯の隊列いかめしく嚴なりし禮拜の作法は今なほ古老の傳ふる所である。

明治の御代に及び西南の役より日清日露の大役、大正の御代の青島役、近くは滿洲事變に屢々威靈の示現ありし事は、能く人の知る所である。

社殿の造営は寛永十三年八月以後、寛文二年徳川家綱金千兩を献じ、修復奉行岡崎城主水野監物元祿十一年十二月徳川綱吉修復建造手傳西尾城主土井式部少輔見廻奉行山中喜兵衛、柘植兵大夫、見分内山清左衛門神寶方鈴木三郎兵衛、清水半右工門、寶曆二年徳川家重銀子五十枚を献じ修復、安永三年徳川家治金七百兩を献じ修復、寛政十一年三月徳川家齊金百五十兩を献じ尙五ヶ國並に府内武家社寺在町勸化を免じ修復その後文化四年三月文政元年二月弘化二年十二月等にも修復を行つた。

明治五年十月十二日村社に列せられ、同廿九年五月郷社に昇格し、同四十年十月廿六日神饌幣帛料供進神社に指定せられ大正六年二月一日縣社に昇格した。

祭神は應神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三柱にして、相殿に東照公を祀る。

例祭は十月十五日もとは八月十五日往時祭日には必ず岡崎城主より物頭をして警護の任に當らしめまた神馬を曳いて神洗池の周圍を廻る例であつた。

本多忠勝の鹿の角の兜は伊賀八幡宮の神符を以て張り其上を漆もて塗り固めたるものにして神職柴田因幡の作である。忠勝大小五十七度の合戦に従ひしが遂に微傷をも負はざりし事は偏に神靈の加護に因るものなりと傳へて居る。

境内に牟久津社祭神大上總社祭神天安藝社祭神市杵讚岐社金刀比羅社祭神會がある。
もと境内に本地佛藥師堂並に鐘樓ありしが神佛分離の際破却した。鐘の銘は次の如くであつた。

三州額田郡伊賀八幡宮寶鐘

御再興 祝詞 柴田刑部少輔源政時

元祿十一戊寅六月吉祥日 大工安藤金右衛門宗次

特殊神事 正月七日曉天現在は節分の日に武者的と稱して拜殿の前の西脇に眞砂を敷き詰めて清淨にし、神籬を樹て、七草粥を供へ又脛を献ず、魚は鯨このころなりこれ舊來の例なり今は的を樹て、神饌神酒を供へ脛を献ずそれより荒木弓に白羽

の矢を以てまづ一矢は空高くを一矢は地を射る今は桃の弓に菅の矢を用ひかくて後、射手的に向ふのは薄板を以て製したり、この的の割れたる數によりて其年の豊凶を卜するのである。

寶物

- 縁起書 撰者卜部朝臣兼里 筆者不詳 一巻
- 正保二年正月松平志摩守重成奉納
- 戸帳 錦地 徳川家康自筆 一垂
- 永祿九年十二月奉納
- 後陽成天皇宸筆 紙地 文字八幡大菩薩 一幅
- 徳川家康奉納
- 棟札 慶長十六年六月 寛永十三年八月 三枚
- 元祿十一年十一月
- 鏡銘 天下一清水丹作 松平親忠室奉納 一面
- 大鏡 無銘 寛永十五年酒井備後守忠朝奉納 一面
- 牛切劍 銘 飛騨守氏房作 神官柴田家奉納 一振
- 兜 熊植毛前立兔耳 松平親忠奉納 一頭
- 弓 松平清康奉納 一張

- 箭 白羽の神矢 松平廣忠奉納 一手
- 箭 鴛の羽 徳川秀忠奉納 一手
- 箭 鴛の羽 銘石道作 安藤伊賀守重光奉納 一手
- 鞭 梨子地金葵紋散 徳川家光奉納 一條
- 船幕 松平廣忠奉納 一張
- 大太刀 銘武州住繁定作 高力左近高長奉納 一振
- 太刀 銘因幡守藤金辰作 神官柴田正照奉納 一振
- 軸物 贈正四位竹内式部筆 一幅
- 茶碗 作者不明 松平親忠奉納 一個
- 鳥居古木 慶長五年關ヶ原合戦並に元和元年 一片
- 大阪陣の時奇瑞を現はしたる鳥居の古木

右寶物中白羽神矢、鴛羽箭安藤重弓徳川清錦戸長、大太刀高力高鏡酒井忠は明治天皇明治十一年北陸東海御巡幸の砌十月廿八日岡崎御着輦此の夜暴風雨の爲め豊川橋流失し廿九日岡崎に御駐輦の折天覽に供しまつた。

昭和八年一月二十三日 石鳥居、神橋、隨身門、御供所、拜殿、幣殿、神殿、透塀共に國寶建造物に指定せらる。

三六

井田野古戰場

井田野は岡崎市の井田町並に額田郡岩津町の地内にわたる魂魄野とも、魂場野とも稱へ、數回の古戰場である。松平三代信光、其子親忠と共に應仁元年八月二十三日尾張の品野、三河の伊保の兵と此處に戦つて之を破つた。かく傳ふれどこの應仁元年の戦は次の明應二年の戦と混じたるものゝやうである。次に明應二年十月二日、碧海郡上野城主阿部滿五郎或は孫次郎万五郎加茂郡或は宗左衛門寺部城主鈴木日向守、舉母城主中條出羽守、伊保城主三宅加賀守、八草城主那須惣左衛門或は宗左衛門等三千餘騎を以て岩津城を攻めた松平四代親忠二千人或は千餘或は千五百などもあるを率ゐて奮撃大に之を破つた。敵將三宅加賀守清宣我軍松平太郎左衛門長勝戦死し、高宮村住人三後彦次郎光貞も深傷を蒙り程なく死す。此戦に陣歿せる敵味方の死屍を埋めたるを千人塚と謂ふ。然るに夜に及んで阿鼻叫喚、劍戟相打つ聲絶えず乃ち念佛堂を建

て、其幽魂を弔ふた。今大樹寺極樂橋の南丘に在りて西光寺と號する。

次に永正三年八月伊勢新九郎長氏宗瑞、早雲駿遠參の三ヶ國の兵を率ゐて、二十日に吉田豊橋を發し、大平河を前に當て、生田に陣し、翌二十一日二連木、牛窪、伊奈、西郡の兵を以て岡崎城の押とし自ら根石原に上り、甲山を越えて大樹寺に陣を取り、まづ岩津城を攻めた。

安祥に在りし五代長親は、一族郎黨を集めて最後の酒宴を催し千三百餘騎を率ゐて、桑子筒針を経て矢作川を押し渡り、喊聲を揚げて横合より伊勢氏の軍を衝く、岩津の軍また城を開いて突撃し激戦一日、夜に入りて長氏甲山に退く、然るに田原の戸田彈正少弼憲光密に松平氏に通ずる由を聞き、また軍を吉田城に引くついで駿府に歸つた。

これが普通に傳ふる所であるが實はこの際今川軍の三河侵入は前後二回に及んだやうである。即ち第一回が文龜元年八月廿二日にして第二回は永正三年十一月十日頃の事と考へらるゝ、而して第二回には今川氏三六親自ら將として十月三日に吉田城主古伯入道野成時を陥れ、進んで西三河へ侵入したのであるがまたこの井田野に於ても激戦が交へられた事と思はるゝ。

三七

天文二年三月二十日加茂郡（西加茂郡）廣瀬城主三宅右衛門尉（貞安）寺部城主鈴木日向守（重教）等また岩津城を攻む、岡崎城主松平七代清康之と此處に戦つて粉碎す。我軍松平三郎次郎親次奮戦し松平太郎左衛門勝茂重傷を蒙り其子彌十郎信茂討死した。

此年十二月信州の兵（何人の軍か詳ならず）數千、此野に殺到す清康また之を撃破す。大河内左工門佐元綱、中根平兵衛正行、重傷を負ひ、本多彌八郎忠正及び其子十三郎助俊討死した。

天文四年十二月五日、清康の尾州守山に急死するや織田彈正忠信信長の父の備後守三千餘騎を率ゐて進んで大樹寺に陣し、一舉に岡崎城を屠らんとした。清康の子廣忠時に年僅に十歳岡崎の運命且夕に迫る、是に於て廣忠の叔父三木の藏人信孝淺井の十郎三郎康孝決死の兵八百を率ゐて井田野に死闘し、漸くに敵を退くる事を得たれど味方の高力備中守重長、同新三郎安長、細井喜八郎勝重を始め二百五人討死した。大久保彦左工門の三河物語にこの戦の事をくはしくしるし、三河にて伊田合戦といへるは是なりといへる如く岡崎の將士は清康に殉死する覺悟を以て血戦したのである。此戦の日はやはり三河物語に、守山くづれて十日を過ぎざるにとありて十二日の事であると云ふ。

前後數回總て松平氏に忘るべからざる古戰場である。野は拓かれ耕されたれど松もなほ雨そぼ降る宵月暗き夜鬼啾々の聲ありとか。

千人塚 三河堤に「明應二年の戦死、天文四年の戦死を合せて葬ると云ふ。大塚の上に常念佛堂あり、これは往古此塚の下にて亡魂叫喚す。大樹寺の上人登譽一字を建て回向し、常念佛を置かる、今も三日止むれば、地中にて叫ぶ聲聞ゆと云傳ふ。歸敬録には、親忠君の仰によりて勢譽上人此堂を建立し給ふとあれども考ふるに其時ならば明應合戦の亡士ばかりなり、登譽上人の時と云ふ説實なるべし」とあれど傳へには明應の戦の戦死者を埋めたる所と云うて居る。千人塚石塔。正面に南無阿彌陀佛。左に井田塾戦亡靈金臺。右に元祿九壬子年八月廿九日大樹寺廿八世忍譽碑銘と刻す。

首實驗塚 井田街道の東方に在り。近來まで驗の松が存して居つた。明應二年の合戦の時の首實驗の所と云ふ。

茶毘所松 井田野の阿知和村に通ずる路の東にあり。石垣を廻らす、松平親忠の遺骸を茶毘せる所である。

酒井忠善墓 井田町の北端、縣道の西側に、酒井左衛門尉忠善の墓がある。忠善は酒井左衛門尉忠次の兄である。天明三年七月に十世孫羽州鶴岡城主左衛門忠徳の建てたる山を刻してある。なほ大樹寺の塔頭回向院に左衛門尉家代々の墳墓があり、その城址は井田町の西郷中に存する。
 なほ西光寺念佛堂の在る丘の西麓に石川日向守家成の茶毘所の松があり、碑が立ち文學博士佐々木信綱の撰文が刻してある。

大樹寺 市外岩津町鴨田

大樹寺は云ふまでも無く松平氏（後の徳川氏）の菩提寺であるから、大樹寺の盛衰はやがて松平氏の盛衰を語るものであり、大樹寺の沿革は實に松平氏の歴史の小縮圖といふべきものである、次にその大要を記述する。

傳に云ふ、應仁元年癸丑八月二十三日（大樹寺舊記には八月廿三日とあり、草創界記、寶永五）尾張の品野、參河伊保の多數の兵（二万余騎としる）井田野に打つて出づ、松平四代親忠、僅に五百餘騎を以て、伊賀村の東覆盆（せるもあり）

子繩手迄馳向ひ、一夜半日の戦に敵潰敗す、松平勢勝に乗つて細川、大澤迄も追撃し、あまたの首級を獲た。此時戰場に遺棄したる敵味方の死屍を埋めて塚を築く、世に首塚または千人塚と呼ぶ。然るに其後この千人塚頻に鳴動して鯨波を擧げ、劍戟相打つ音の絶ゆる時なく、近里驚倒往來を絶つに至つた、仍てこの亡靈を弔はんため塚のほとりに念佛堂を建て、宇禰部福林寺の勢譽愚底を請じて解脱の念佛を唱へしめた、其後親忠更に成道山松安院大樹寺を建て、菩提寺とし、勢譽を以て開山とした、時に文明七年二月二十二日であつた。

大樹寺記録には戦死者の亡魂脱苦の爲め、大樹寺を建て一七日別時念佛を修めたる由にしるす、されど井田野古戦場の條にも述べたる如くに、この應仁元年の合戦は大樹寺舊記大樹寺帥創記に載するのみなれば恐く明應二年十月の合戦を混じたるものと思はるゝ。而して念佛堂は亡靈菩提のために建てたるものであり、大樹寺は松平家の菩提寺として建立したるものであらう。それと同時に氏神として伊賀八幡宮を勸請したるものと考へらるゝ。

さて勢譽は當寺に在る事三十年の後、本山知恩院の住職に轉じ八年の間在勤した。その間に大樹寺が大破

に及んだので第三世の雲譽愚廓が、松平五代長親同六代信忠と力を合せて修造した。かゝる内に勢譽は知恩院を退いて大樹寺に還り、愚卜舎を建て、閑居したるが、此時大樹寺永代式定書を作りて勢譽、雲譽、道閑（長親）道忠（信忠）の四人が加判して居る、長文であるから略するが、日附に永正十年癸酉孟秋十日とある。其後松平七代清康の時に及んで三河を一定したる勢を以て、當寺の再興を企て、七堂伽藍莊嚴の堂宇、並に多寶塔の造營に着手した。

此工事は數年にわたり、天文二年の十一月に清康が制札を出して居るのは既に大體の工事が成就したる際の事と思はるゝ。かくて天文四年には工事竣功を告げ、多寶塔は同年五月に（眞柱銘文の寫には天文四年卯月二十九日身柱立とある）建立せられたのである。而して勅額並に勅願寺たる繪旨を下されたのは此際の事かと推測せらるゝ。住職玉譽、並に超譽上人などの請願に因つたものではなからうか。

天文四年の末に、清康は守山に死歿し、織田氏の軍が大樹寺表に打つて出たのであるが、幸に戦塵に汚れずしてなほ生存せる道閑（長親）並に住持玉譽等により殘餘の事業は繼續せられたるものと思はるゝ。然しながら何分大檀那なる松平氏の勢力が次第に衰へ、漸く今川氏の援助によりて岡崎城を保つに過ぎぬや

うの次第であつたから、殿堂修葺等については大なる苦心があつたものと推測せらるゝ。されば此儘に過ぎ行かんには可惜勅願寺たる著名の寺院も衰廢すべきは明瞭の事であつたから「勅願寺として他に異なる大樹宇の維持に就いて、別儀なきやう今川（義元）が取斗ふならば御喜び遊ばす山の御事を太げん（大原）即ち雪齋によくく傳ふるやうに」との女房奉書が出で、並に籤大納言季遠の雪齋宛添狀も發せられたものであらう。

無論廣忠在世の間は我が菩提寺の事であるから、及ぶ限りはその維持修理等に力を盡したに相違なく、天文十二年三月七日天文十六年十二月五日の寄進狀も遺つて居るのである。その他松平一門の寄進狀の多き事は、その文書目録によつても知らるゝ。

朝比奈備中守と雪齋と連署の安堵狀があるのは、廣忠死後天文十八年十一月九日に雪齋等が安祥城を攻落し、その後暫く岡崎に滞在して、廣忠死後の善後策を講じたのであるから、その時出したるものと思はるゝ。廣忠の歿後、即ち天文十八年以後は岡崎の上一切今川氏の節度を受けたのであるから今川義元は天文十九年六月十三日に安堵狀を出し同年十月十日に定書と安堵狀を出し天文二十年六月二十一日並に同二十二

年十一月二日に安堵狀を出して居る、永祿に入つては家康の寄進狀掟書法式が甚だ多い。

時代は移つて永祿より元龜となり天正となり、徳川氏の勢力は次第に擴大して濱松より駿府、駿府より江戸とその居城を移して遂に慶長五年の關ヶ原の一戦に覇權を握るに至り、同七年六月二日にこの祖先以來の菩提寺に寺領六百十六石四斗三升の朱印狀を下した。

かくて家康は翌慶長八年の二月に將軍となり、こゝに大樹寺號の名實が共に合致する事となつた。文明七年の建立當時より正に百二十九年である。慶長十一年には勅願寺並に常紫衣の綸旨併せて女房奉書が出たこれに知恩院住職の添狀が二通ある。

さて殿堂の修覆に就いては、天文五年以後も時々行はれた事であらうし、特に家康の岡崎在城時代には恐らく造營に力を注いだものと思はるゝが、今明で無い。

元和三年に先祖八代の墓碑、並に大樹寺寮舎の建立があり、家康の一周忌法要をも營んだ此法事料三千俵三千貫であつた。寛永十三年家光將軍家康秀忠兩御靈殿を造營、その他殿宇寮舎を新に建立すべき命を下し、寛永十五年二月二十二日より普請始、寛永十八年十一月十二日に成就した其後家綱將軍の時延寶四年

に修覆を施し、更に綱吉將軍の時元祿十年並に寶永五年に修覆があつた。

寶永五年の書上にしるす所の殿堂は大略左の如くであり、即ち家光の建立せるものである。

本堂。佛殿。開山堂。東照宮御靈殿。豪徳院御靈殿。多寶塔。鎮守社。三門。千體堂。鐘樓。衆寮。大方丈。小方丈。大庫裏。小庫裏。四足門。南表門。東裏門。土藏。木藏。什物藏。祈禱堂。多寶塔佛。千躰堂。三門。方丈佛。食堂。

參河聴視録、參河名勝志には書院の畫すべて狩野永徳の筆とあれど、大樹寺は寛永十五年より同十八年にわたつて新しく建造せられたりといふに、永徳は天正十八年九月十四日に歿して居る。さればこは狩野探幽筆を誤つたものでは無からうか、探幽守信は徳川家と深き縁故があり、大樹寺に筆を執るべき充分なる因縁を有する寛永十五年は探幽三十七歳の時である。

然るに安政二年正月廿六日に火災に遭ひ、山門（三門）南門、鐘樓、裏門、多寶塔を除く外、悉く燒失した。仍て直に再建に着手し安政四年五月に竣功した。然し規模は炎上前より少さくなつて居る。本堂、書院の壁畫、襖、杉戸、すべて冷泉爲恭の畫く所である。

爲恭の自筆目錄に云ふ。

御靈屋

母屋御障子

蓮之繪

右

安政第四曆十巳九月日 藏人所衆關白直廬預正六位下行式部少弐爲恭

大方丈御繪

上段

圓融院天皇子日御遊之圖

下段

三條左大臣實房公茸狩之圖

鶴之間

牡丹之間

鏡仙之間

杉戸

東遊

花籠

鴛鴦鴨

郭公

右

柳蔭浴馬

蘇鐵麝香

布袋和尚

岩鷹

永德十一世伊勢守永泰三男

藏人所衆關白直廬預正六位下行式部少弐爲恭

安政四年九月日

小方丈御障子

春秋山水

杉戸

松櫻

淵明觀南山

右

瀧楓

安政四年秋九月日 藏人所衆式部少弐爲恭

と、即ち安政四年の九月に成つたものである。

關貫木神 所謂東照公大樹寺御陣の時永祿元年尾州三州境目の合戦、或は寺部筋の合戦の時、また永祿三年五月桶狭間合戦の時とも敵あまた大樹寺に押寄せ。家康切つて出でんとして鎖せる門を早く開けよと二刀まで關貫木に切付けた。この時七十人力ある祖洞坊と云ふ者、厭離穢土欣求淨土の旗を掲げて奮闘したと正史には合はぬやうなれど、これより開運の奇瑞があつたと云ふので神として祀つたのである。

八代の墳墓 親氏、泰親の墓は松平村高月院に在り、三代信光の墓は岩津の信光明寺に在る。三代まではそれを移したのである。親忠の墓は五代の長親の建立といへばその子が次第に先考の墓を築き建てたるものと思はるゝ。然るに大樹寺山緒書には元和元乙卯年に家康の御再興とあり、また元和三年に先祖八代の墓碑建立ともある。こは共に修復を施したることを云ふたのであらう。墓の高さに就いては三河みやげ(安政四年四月の記)にしるす所は、親氏、泰親三尺八寸三河名勝志にはこの兩墓を三尺三寸としてある、信光四尺八寸、右御三代、文明七年十一月廿三日御四代親忠大樹寺御建立に付、御寶塔當寺へ御建。親忠六尺七寸、元和三年御寶塔御造立御廟と稱候魂場野に有て之御墓、今榎大阪御陣、同落城、嶋原陣以上三度共榎之葉不_レ出。長親六尺一寸、信忠五尺九寸、清康六尺一寸、廣忠五尺と、これに親忠の墓は元和三年の造立とあるが、もと

長親の建てたるのを當寺の開基であるため更に壯大に改め建てたのである。

多寶塔 天文四年五月に竣工家光の寛永十五年堂宇再興の時、修理を施した。明治三十七年二月十八日特別保護建造物に指定大正八年四月九日修復に着手翌九年二月二十八日に竣工。

旗懸松 所謂家康公大樹寺御陣の時、厭離穢土欣求淨土の旗を懸けたる所と云ふ。然るに三河みやげによれば信忠をこゝに茶毘しその驗として清康が自ら松を植ゑたるものにて、印松と呼んだとある。今は枯れてその跡に若木の松が生立つて居る。

塔頭十二院 大樹寺記録には、竹用軒、寶珠院芳樹院、善揚院、開花院、棹舟軒、花香院、愚耕院、慈光院、信樂院信行院、回向院、要蓮院、忍阿院法性院とあるが、三河名勝志には花香院、要蓮院、忍阿院が無くて、そのかほりに、常在院、易往院、國洞院がある。參河みやげには、安栖院、花香院華光院、善揚院、寶樹院、竹用院、開花院、棹舟院、回向院、忍阿院、信樂院とありて二ヶ院を減じて居る。今は纔に數院を存するのみである。この塔頭回向院の境内に酒井左衛門尉家五代の墳墓があり、井田野に左衛門尉忠次の兄なりと云ふ左衛門忠善の墓があり、天明三年七月に十七世羽州鶴岡城主左衛門忠徳の建てたる由を刻し

てある。

五〇

西光寺 念佛堂の在つた所である。五代の出雲守長親が再興して長親山西光寺と稱へた。其後しばしば修築を行つたのである。長親の茶毘所の松があり大衆塚がある。大衆塚は所謂大樹寺御陣の時戦死したる衆徒を葬つた所と云ふ。本堂の西に在る千人塚は本堂の南方に在るもとは堂宇が今より南方に在つたので千人塚はその前に當つて居つたのである。なほ境内に内藤右京進義清並にその室の墓がある。また寛保三年十月に建てた。夏草やつはものどもの夢のあと の芭蕉の句碑もある。また寛政十二年七月の中村氏三墳碑がある。撰文は柴野邦彦栗山である。大樹寺には寶物古文書類甚だ多く一々擧げ難ければこれを略する。

〔参考〕 探訪地

大林寺

大林寺は阜光院と曰ひ拾玉山と號す。魚町四十六番地に在り、西山深草派誓願圓福兩寺の末寺である。開山は天盈良倪上人岩津村妙心寺二世、明應八年十二月十日寂すにして、明應二年岡崎城主松平彈正左衛門尉信貞の創立に係る、或云、始めは禪宗にして光林寺と稱し、曆應元年の開創なりと。

享祿四年八月、松平清康制札を下して當寺の西門に建つ。天文四年十二月五日清康尼州森山に變死するや遺骸を菅生丸山に於て荼毘す。是より先、清康の夫人春姫西郷彈正左衛門尉信貞の女遁世して元能と號し當山にありしが、乃ち乞うて其遺物を當寺に收めた、同十七年二月十六日元能尼歿す。法名を花嶽院殿芳月清春大姉と號した。同十八年三月六日清康の子廣忠の歿するや、敵のその虚に乗ずるを憂ひ密に遺骸を大林寺に移し光善寺安養院等隨侍護衛しのち能見の原に葬り、其肉髮爪及び肌付等を境内に納めた。是に依て清康廣忠

春姫の靈廟何れも當寺に存在するのである。

天正八年四月廿五日徳川家康當寺式目を定め、慶長八年九月十一日朱印百石を賜ひ、同時に當寺の正門に下馬札を建てた。

第四世泰翁慶岳は、徳川家康の歸依僧にして諏訪山誓願寺の開山である。第十世念翁清存は寛永五年方丈茶之間、勤學之間、浴室、納所寮、庫裏客殿、庫裡之間、廊下、鐘樓、表門西裏門北等を造立し、第十一世貞翁傳徹は寶永七年七月常紫衣の給旨を賜ふ。第十二世滿空絶維は、寛文八年十二月十八日本堂客殿を再建した。

本尊は木造阿彌陀如來坐像惠心作にして、現今の堂宇に本堂明治十四年再建、庫裏明治三十一年再建、廻廊明治四十二年再建、鐘樓鐘銘萬治三年暮廿五日、地藏堂天正十九年田中吉政創立、厨屋大正十二年再建、門等がある。塔頭はもと運照院、受福院、福正院、安勝院、正受院の五ヶ院參河國名勝志に塔中七ヶ院とあるは誤也、恐らありしが、運照院、受福院、福正院は明治に至りて廢せられ、安勝院は明治十七年東加茂郡岩谷村に移り、正受院は同廿五年同郡羽布村に移りて、今は全く此地に跡を残さぬ。

寶物

- 常紫衣御給旨 一通
- 世良田清康書翰 一通
- 板倉勝重書面 一通
- 下馬札(慶長八年徳川家康下附) 一札
- 世良田清康制札 一枚
- 徳川家康式目 一卷
- 縁起書 三卷
- 曼荼羅畫像(傳曰惠心筆) 一幅
- 布袋畫(狩野光頼筆) 一幅
- 水野忠善書(寛文四年八月附) 一幅
- 開基良倪參內衣 一具
- 獅子頭石(徳川家康命名) 一個
- 善導大師木坐像 一體
- 圓光大師木坐像 一體

尙境内墓地に、西郷彈正左衛門頼嗣文明九年三月二十一日卒 同信貞大永五年七月廿二日卒 青山喜三郎忠世天文四年三月廿七日卒、法名 河合勘解山左衛門家忠 元龜元年二月廿一日卒、法名 根譽淨善居士 慶長四年三月十五日卒 成頼伊賀守國次 慶長七年正月七日卒、八十一等の墓がある。

甲山寺

甲山寺は、龍城良院と曰ひ、長輝山と號す、六供町字甲越十七番地に在り、天台宗。大永四年碧海郡安城の城主世良田次郎三郎清康、岡崎城に移るや、享祿三年同城鬼門の守護として、大同三年傳教大師の創立に係る安城村藥師堂並に其六坊（東圓院、多寶坊、極樂坊、吉祥坊、花藏坊もと法壽坊）を此地に移轉して、長輝山甲山寺と號す。此寺號に就ては、寺記に、人皇十二代景行天皇の御宇、日本武尊、東夷征伐の途すがら、矢作の里に宿りたまひし或夜の御夢に、三人の老翁顯はれ、吾等はこちら三台星なり、東夷を鎮めんと出立ちたまふ御身を護りまつらん、凱旋の日、甲をもてわれ等を祭りたまへと云ひ、遠く飛んで東の山に下り、三つの大なる石となつた、尊は奇異の思をなしたまひ、歸ります日に

夢の告の如くこゝに甲を埋めて、この星の精を祀りたまひたりと。其後八幡太郎義家もまた東夷征伐の命を蒙りて此里に至り、日本武尊の由緒有る事を聞き、是れ無双の靈地なりとて、同じく甲を埋め、山神に手向武威長輝を祈るとなん、此等の事實により、松平家にいたり、僧坊を建造して長輝山甲山寺と號すとするしてある。

其後廣忠又和田山法性寺一山六坊（定光坊、杉本坊、密祥坊、中三坊、密嚴坊、大圓坊）を此地に移し、新に護摩堂一字を建立して此れを當山の惣本堂と定む。時は天文十三年の三月であつた。もと安城六坊の本法性寺六坊の本堂は大日堂であつたが、こは村民願によりて其地に殘す。但し當寺の支配である。

以來毎年正月十一日、一山衆徒登城の上、七座の護摩供を修行し、武運長久子孫繁榮を祈り、尙當山に於ては長日護摩供を修して國家の安寧を祈禱す。當時一山十二坊にして大に勢力あり、殊に徳川家康出陣の際に、屢々從軍して戰勝を祈り軍功を建てた。

其後十二坊の中、五坊は戰死或は滅絶し、殘る七坊の中、法壽坊は御朱印頂戴の爲め駿府へ赴く途中、不慮の災禍に遇ひ、出奔して遂に六坊となつた。

慶長八年三月家康本堂を再建し、同年八月十八日寺祿二百五十石を賜ふ。六供六坊の名此時より生ずと云ふ。元祿十五年二月廿八日、將軍綱吉更に本堂を改築す。此時前佛不動二童子及十二天の像を新彫す。是は勢州桑名城主松平越中守定重、豫州松山城主松平隱岐守定直、羽州秋田城主佐竹右京大夫義處、泉州岸和田城主岡部美濃守宣就、遠州横須賀城主西尾隱岐守忠成、豫州今張城主松平駿河守定勝、當國刈谷城主阿部伊豫守正春等の寄進する所、而して現今の建物は即ち當時の遺物である。又代々の岡崎城主は祈願料を納めて武運長久を祈り、明治初年迄は、參河有數の大寺として、其重きを爲し居たりしも、廢藩置縣と共に祿寺祿を失ひ、維持困難となりて、六坊の内、東圓院、定光坊、華藏坊、密祥坊は、極樂坊に合併せられ、多寶坊は甲山寺に合併して、今は僅に其二ヶ寺を餘すのみとなつた。甲山寺とは、もと六坊の總稱にして、即ち護摩堂を云ふたのである。始め六坊の塔頭は東圓院にして、東叡山内東圓院の住職が兼務して、甲山寺一山を統轄して六坊の住職輪番にて東圓院に居し、各年行司を勤めた。明治七年十月三日東圓院を極樂寺へ合併するに及び、同八年本國風來寺山内岩本院住職が甲山寺兼住となつた。本尊は木造不動明王像、現今の堂宇には、本堂、地藏堂、鐘樓寶永六年建立、門寛文七年十月二日建立等がある。

寶物

緣起書

一卷

本尊不動明王木像傳、弘法大師作、御足の裏に當國志貴庄安祥村としるせる由、利劍の銘、因幡の作

一體

二童子木像

二體

前立不動明王木像

一體

同 二童子木像

二體

十二天木像

十二體

阿彌陀如來木坐像 九寸五分厨子入、元六供八幡宮の本地佛

一體

傳教大師木像

一體

天台大師木像

〃

慈惠大師畫像

〃

同 狩野法師探幽筆

〃

三千佛畫像 永正十六年十一月三州碧海郡志貴之庄安城々主寄附

三幅

甲山寺扁額原書

二品天眞法親王(輪王寺宮、後西院天皇皇子)御筆、元祿元年九月、表裝寄進豫州松山城主松平隱岐守定直

長輝山扁額原書

一品公辨法親王(天台座主、後西院天皇皇子)御筆、元祿六年十二月

扁額 甲山寺額、長輝山額

二面

棟札

天文十三年三月松平廣忠建立慶長八年三月徳川家康公再建、元祿十六年二月徳川綱吉公再建

三枚

鏡 銘、藤原吉重、藤原正歳

二面

銅打鳴 銘、天下一出羽大塚宗味作

鰐口

銘に云ふ、奉掛鰐口三州長輝山甲山寺八幡御神前之所。經緯九寸、重量壹貫廿日、大工安藤藤左衛門、慶長十七壬子年十二月廿八日

今、護摩堂の後の丘上に鎮座ある八幡宮は、もと安城に在つたのを、清康が甲山寺を移したる享祿三年に共に遷座したのである。はじめは岡崎城内に在つたのを、永祿五年に家康が今の地に勸請したものと云ふ。

誓願寺

誓願寺は泰翁院と曰ひ、諏訪山と號す。梅園町字虎石九番地に在り、西山深草派誓願圓福寺兩寺の末寺である。

開山を泰翁慶岳と云ひ、永祿九年徳川家康の官位勅許に就いて轉旋する所があつたので、家康之を徳とし乃ち泰翁の爲め此地に一字を建立した。是れ即ち當寺の開創である。こゝに元來諏訪の神祠あるを以て山號としたものである。泰翁はじめ大林寺に住職し、のち京都誓願寺に轉住したるが永祿年中生國三州岡崎に退隱したりしを家康爲にこの寺を開いたのである。泰翁並にその弟子重源の事は言繼郷記(大納言山科)にしばし見えて居る。重源は塔頭の善重院に住したりしが慶源死後善重院は斷絶した。

慶長年中伊奈備前守忠次黒印十石を附し、慶安元年二月廿四日徳川家光寺領十一石餘(十一石三斗七升八合)の朱印を賜うた。

天保十年十月十日、本國名産花崗石を以て一丈六尺の地藏尊を建立す

臺坐を合せ、其高さ三丈餘の大佛である

岡崎の大地藏

と云ふは是である。

安政四年回祿に逢ひて諸堂宇悉く烏有に歸し、文久三年本堂を再建した。

本尊は木造阿彌陀如來坐像元祿十一年十二月十五日にして、觀音、勢至享保元年仲冬大河の脇士である。

現今の堂宇には、木堂、地藏堂、座敷、納屋、鐘樓、門等がある。境内に虎石あり、こは永祿年中徳川家

康、此山諏訪明神の地の地に遊びて半弓の稽古ありし時、此石に腰掛けて休憩せられしものである。當時泰翁

此邊に住せしを以て、濃茶を献じ大に懇信があつたと云ふ。

尙當寺の鳴鐘は、始め本郷大草光明寺にありしが後西郷彈正左衛門之を岡崎城中に移し、更に年代を経て此寺に寄進したるものであると、無銘なるを以て鑄造の年代が明でない。

寶物

徳川家康官位に就いて京都よりの書狀

二通

足利義輝消息

一通

大須賀康高寄進狀

一通

慶岳上人遺書(自筆)

一通

徳川家康 短冊

一

獅子香盆

一

總持寺

總持寺は、深恩院と曰ひ、瑞生山と號す、もと籠田町四十八番地にありしが、今は移つて中町小猿塚に建立せられた。

寺傳に據れば始め天台宗にして順徳天皇の御宇建保二年本間三郎重光の創立、皇女利慶徳善大比丘尼の開基であると云ふ。貞應二年十月廿八日、徳善大比丘尼遷化の後、姪の宮なる善崇大比丘尼法統を繼ぎ、嘉禎三年七月四日示寂す、以來住持を缺く事六十年、堂宇殆ど廢頽に歸した、此時に當り額田郡の領主高左衛門師重の女法名心妙、尼となりて當寺を再興し、額田郡比志賀の郷を寺領とした。時に永仁四年三月一日である。是より禪宗となる。觀應二年五月廿一日足利直義寺領安堵狀を心妙に與へたるが、此年十月十二日心妙尼寂す、こゝに於て、高播磨守師冬之妻なる高越後守師泰の女法名妙阿、入つて住持となる。此

時寺領なる菅生郷は、一時高師泰の孫にして師世の子なる刑部丞師秀の領となりしが、妙阿の愁訴によりて再び天和四年八月廿三日より當寺の領となる。貞治五年九月十三日妙阿尼寂し、高越後將監師世（師泰の子）の女法名建頼、法嗣を繼ぐ、應永六年八月一日建頼尼寂し、高播磨守師冬（義滿の女とあれど其詳なる事は知り難い）の女繼ぐ、是を第六世見用尼といふ。應永十一年五月十二日寂し、將軍足利義滿の女法名眞康（義滿の女とあれど其詳なる事は知り難い）繼ぐ、よつて義滿は更に尾張國松岡庄を寄進し、同十五年十二月七日將軍足利義持更に安堵狀を與へて居る。その後天下大に亂れ、甲斐の武田氏尾張の織田氏等、恣に邊境を侵し、當寺の領地たる比志賀郷及松岡庄も亦其領有となりて、寺運次第に衰へた。第十三世理薰尼は設樂郡作手川尻の城主奥平美作守貞能の女、兄長祿の城主奥平信昌の室は徳川家康の女にして、岡崎三郎信康の妹である。元龜二年第十四世芳薰尼繼ぎて住持となる。芳薰尼は家康の庶女にして母は矢作嶋田彈正の家臣鍋田氏の女であり、其生るゝや理薰尼之を養ひ乃ち弟子となし、茲に至りて法嗣を繼がしめたとある。

當時の岡崎城主信康堂宇を修復した。然るに天正十八年田中兵部大輔吉政、岡崎の城主となるに至り、寺傳の寶物什器等沒收せられしもの多く、剩へ菅生郷の内菅腴の地も悉く其奪ふ所となりて、寺産頗る窮乏

した。其後徳川家康征夷大將軍となるに及び、慶長八年八月廿八日寺領百石を寄進せられた。

明和年間に至り、正親町三條入道前大納言公積の女入つて住持となる是を二十世惠明尼といふ。天明四年十一月廿五日、國家安全寶祚長久を祈り奉るべき繪旨を蒙つた。次に正親町三條宰相中將實同の女繼ぐ、第廿一世大乘尼と云ひ、嘉永元年二月十六日寂し、第廿二世覺文上人繼ぐ、上人は正親町三條實義の養女にして實は柳原大納言隆光の女である。安政元年十一月の大地震に堂舎悉く破壊、是に於て京都の縁故をたどりて寄附を依頼し、漸くに修復を終へた。元治元年五月四日また國家安全、寶祚長久を祈り奉るべき繪旨を下された。同月十八日參内拜謁を賜ふ、後明治八年三月柳原家に復籍し、同廿九年三月寂す。後當山は尼寺を改め龍海院末に復して僧寺となり、以て今日に及んだ。

本尊は大日如來である。

もと寺境に稻荷社あり、築山稻荷と云ふ、當時の鎮守にしても岡崎十二社の一であつた。

古文書類

繪旨（天明四年十一月廿五日、元治元年五月四日）

二通

- 稻荷之女房へ讓狀 (永仁四年三月一日、久明親王花押) 一通
- 心佛讓渡狀 (永仁四年三月一日、心佛花押) 一通
- 足利直義下文 (觀應二年五月廿一日、直義花押) 一通
- 足利尊氏總持寺領安堵狀 (九月晦日尊氏花押) 一通
- 足利尊氏寄進狀 (尊氏花押) 一通
- 足利尊氏書狀 (文和四年八月廿三日、尊氏花押) 一通
- 高師秀去狀 (文和四年十月八日、師秀花押) 一通
- 仁木義長書狀 (二月七日、西郷彈正左衛門宛義長花押) 一通
- 足利義詮書狀 (義詮花押) 三通
- 足利義滿寄附狀 (應永六年九月二日、義滿花押) 一通
- 足利義持寄附狀 (應永十五年十二月七日、義持花押) 一通
- 足利義量安堵狀 (應永三十年四月十一日、義量花押) 一通
- 足利義教安堵狀 (永享九年二月廿五日、義教花押) 一通
- 斯波義將安堵狀 (應永十四年十二月二十一日) 二通
- 同 十五年十二月二十日

- 高山滿家安堵狀 (應永三十年九月廿八日、滿家花押) 一通
- 高山德本安堵狀 (文安元年閏六月廿一日、德本花押) 一通
- 内藤左馬助書狀 四通
- 光格天皇繪旨 一
- 仁孝天皇繪旨 一

大泉寺

大泉寺は東林山と號す、初めには桃林山大仙寺と書いた、中町字東丸根三十番地に在り。
 天文十二年徳川家康の母傳通院(お大の方)の創立にして、俊惠藏主(永祿二年八月十五日寂)を開基として居る。
 傳へ曰ふ、天文十一年、お大の方懐妊するや命によりて俊惠藏主登城し、持佛堂守本尊藥師如來寶前に於て、日々安産の祈禱を行ふ、同年十二月二十六日家康誕生あり、之れに依りて城の東北に一字を草創し、即ち持佛堂の藥師を本尊とし、且十三佛一軸、紋付打敷、幕、焼灯等を寄進し、寺を大泉寺と稱した、弘治二年六月二十四日今川義元並に松平元信(家康)より寄進狀及び制札の下附があつた。慶長六年二月十

日徳川家康黒印五石を賜ひ、此時大仙寺を大泉寺と書したれば以來専ら之に従うた。慶安元年八月十七日將軍家光寺領五石を朱印に改む、寶永五年正月境内に鎮守白山社を建立した。同年六月晦日龍海院十七世實巖性果和尚入寺し、同七年十一月法地となる。以來龍海院末となり禪宗に屬した。本尊は木造藥師如來坐像行基作と傳ふ五寸八分である。現今の堂宇には本堂、庫裏、玄關、座敷、開山堂、門等がある。尙境内に當寺草創の際傳通院の手植する所と傳ふる臯月躑躅二株及び其遺髪を埋めたりと云ふ墳墓がある。臯月躑躅は已に古木したるも、猶初夏の候梢頭幾多の花を點じ一美觀である。

寶物

- 今川義元制札
- 松平元信制札
- 松平元信寄附狀
- 傳通院書狀
- 寺領五石寄進狀

- 一枚
- 一枚
- 一通
- 一通
- 一通

この寺に傳通院夢想の靈藥と傳ふるものが二種あり、山の寺の藥と呼び、のち湯藥の方を五香湯と云ひ、丸藥の方を保童圓と稱へた。

若宮八幡宮

若宮八幡宮は明大寺町字森畔十二番地に鎮座、境内六百三十三坪を有す、もとは菅生八幡と稱し、天正八年五月の勸請である。一説に當社は初め仁徳天皇を祭り、中古岡崎三郎信康を合祀せしものであると、參國聞書集に曰ふ、當所十二社の内若宮八幡宮は、天正八年庚辰夏五月依上意石川伯耆守數正岡崎三郎源信康公を祭る。菅生八幡と號す、俗に若宮と云へり云々。參河名所圖繪には天正八年五月、石川伯耆守數正上意により築山殿岡崎殿を御廟に敬崇し奉る。此御廟は兩殿の御首也、織田信長公台命により尾州清須へ御首被遺又岡崎へ御遷の砌、大神君より御内意ありて清水万五郎正教葬り奉り御廟を建る、慶長七年御黒印賜る、伊奈氏とあり。また云、若宮八幡宮は、天正七年清水万三郎濱松城に於て御内意あり、根石原觀

音堂境内へ岡崎三郎殿を葬り奉る。同八年八幡宮と崇め奉るとある。又清水氏山緒書には、天正年中三郎信康様遠州二股の城にて被遊御生害、則同所清龍寺へ奉葬候、御母公築山様御儀、遠州濱松の城にて被遊御自害、則同所西來院奉葬候、右信康様築山様御首、信長公方へ御實驗之上、岡崎表へ御差戻之節、大神君様より潜に清水方三郎へ被仰付、根石原觀音之森に奉埋、印に松を植る、三郎松と云是なり。其後岡崎御城内に種々怪異變化等多く御座候故、正敷兩方之御崇也と、此時御靈に幣帛を捧奉る。信康様御儀を若宮八幡宮と奉仰、築山様を神明宮と奉仰候と記してある。其後慶長六年二月、伊奈備前守忠次の名によつて社領二石五斗の黒印を賜つた。

明治維新後神佛分離に依て、境内觀音堂を投町に移す、明治五年十月十二日村社に列せられ、同四十年十月廿六日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

今の祭神は、仁徳天皇・岡崎三郎信康である。殿宇には、神殿。拜殿。渡殿。社務所。籠屋等あり。尙境内に御歛社祭神豊受姫命於初之社祭神信康の侍女吉良於初の靈及び信康の首塚を存す。例祭は十月十三日。十四日。

満性寺

満性寺は田生山と號す。菅生町字元菅五十七番地に在り、高田派専修寺の末寺である。

開基は河内國荒木村萬福寺源海上人の弟子了專上人俗姓安藤にして、正應二年伏見天の創立に係る。正安三

年二月十五日後二條天皇の朝菅生の郷司高松本大上滿境内を寄附す。其後足利尊氏歸依ありて曆應五年伽藍を

建立せしも、程なく回祿に逢ひて太子の尊像のみが残つた。應安三年十月廿七日足利義詮から、尊氏菩提

の爲め田島七段の寄進があつた。明應五年七月松平親忠境内四至の寄進狀を附與し、同六年二月太子堂を

建立した。然るに永正三年伊勢新九郎長氏の兵火に罹りて又燒失し、天文元年に至り本堂を再建した。同

九年松平廣忠寄附狀を附與し、又太子堂を再建した、永祿年中徳川家康當寺太子堂の藪に於て旗竿を切ら

しめ又門徒一接の節も當寺に立寄られた。天正十八年田中吉政岡崎入部の際領内の寺社領を檢地し、當寺

また領地の多分を沒收せられた、其後慶長七年八月伊奈備前守忠次を以て寺領五十石の朱印を賜うた。

寺記に、彼親忠公の御次男御出家有之て、洛陽智恩院廿四世の住職超譽上人と申ける。忝くも後柏原天皇

御歸依他に異なりしかば大永六年四月七日崩御の砌、超譽上人を召され、御臨終の知識とし給ひける、去に依て天皇御渴仰ありし惠心僧都自筆の彌陀の三尊を譲り給ふべき御契約ありし故、御奈良帝より超譽上人へ送り給ふ。即其年智恩院宮の御裏書を加へ給ふ。後智恩院の御住職を遁れ給ひて三州岩津へ御隠居なり、満性寺は起譽上人と親屬たるを以て御遺物として賜りたり。

第十六代寂應の時、寛永六年三月廿八日庫裏を再建し、同十三年客殿、書院、惣門等を建立した。十七代寂善の時、慶安元年三月太子堂を再建し、寛文二年十月十一日鐘樓を建立した。十八代寂譽の時、天和三年七月鎮守觀音堂の再興、元祿四年六月本堂の再興を行つた。廿二代寂湛の時安永二年四月太子堂の屋根を瓦に葺直した。同年六月十九日同八年八月廿五日兩度の大風雨洪水にて、堂宇の破損多く、爾來數度の改築修繕を施し今日に及んだ。

本尊は木造阿彌陀如來立像である。

現今の堂宇には本堂、庫裏、座敷、玄關、經藏、土藏、物置、鐘樓梵鐘銘天正九年、慶長十三年、寛文二年再鑄太子堂等がある。

寶物

- 三尊佛畫像 (惠心僧都筆) 一幅
- 三尊佛超譽上人讓狀 一卷
- 出山釋迦如來木像 (曰、足利尊氏寄附) 一體
- 善光寺如來繪傳 (土佐光起筆) 四幅
- 法然上人繪傳 (法眼元信筆) 六幅
- 十王繪傳 (法眼元信筆) 十三幅
- 鷄畫 (徳川吉宗筆) 一幅
- 近衛前久書翰 一通
- 堂地寄進狀 (正安三年菅生郷司高松本大上蒔花押) 一通
- 田畑寄進狀 (應安三年十月廿七日足利義詮寄進) 一通
- 寺領寄進狀 (明應五年七月十五日松平親忠寄附) 一通
- 寺領安堵狀 (天文九年三月五日廣忠花押) 一通
- 當寺條目 (天文廿一年十一月晦日今川義元花押) 一
- 梨子地金紋付膳具 (近衛前久所持品) 一具

塔頭三ヶ寺 東泉坊。淨泉坊。連珠坊。當山歷代記中に、塔頭十二坊なり、東泉坊、淨圓坊、連珠坊、徳淨坊、三珠坊、眞如坊、安養坊、神光坊、正受軒、慶運坊、紫雲軒、淨法軒、以上十二坊、然るに田中吉政の爲寺領の多分を収めらるゝに及び諸坊退轉、東泉坊、連珠坊、淨圓坊のみ残ると。

小豆坂古戰場

當時は東海道が、今の矢作町大字渡村から矢作の下瀬を渡りて明大寺方面に通じたる頃なれど、此街道は迂余屈回せるを以て、早くから六ツ美村上和田より丘陵山地を別けて藤川方面に出づる間道通じ、此の間道の高低起伏谷をなし坂を爲せる所を廣く小豆坂と呼び、こゝに岡崎市美合町の馬頭野に打つて出でんとする織田軍と、矢作川の下瀬に進出せんとする今川勢と、二回の激戦を演じたのである。

時は天文十一年と同十七年の事なるが、今も馬洗池、槍洗池、槍掛松、足輕塚などあり、足輕塚は十七年の合戦に戦死したる士卒を埋めたる所と謂ふ。

或は厚木坂ともしるし、岡崎市の南方羽根町と美合町との堺に位し、小松林、雜木林相交り、雨を呼ぶ山

鳩の聲、颯々の松韻に和して物哀である。

さて天文十一年八月十日、今川治部大輔義元が、當時織田氏の籠れる安祥城を陥れ、進んで尾張に侵入せんと謀り、駿遠參三國の兵を率ゐて來攻す。織田彈正忠信秀信長の父、備後守の其弟津田孫三郎信光と之を小豆

坂に邀ふ。今川勢松平氏の軍と共にまづ小豆坂に上り、織田氏の軍を瞰下して突撃す。織田勢破れて盜木に退き、名護屋孫四郎秀宗、永田四郎右衛門重宗等討死した。かくと見たる孫三郎信光、槍を提げてまづ進み、續いて織田造酒丞信房、岡田助右衛門直教、佐々木隼人佐勝通、其弟孫助勝重、中野又兵衛忠利、下方孫三郎匡範、長槍を揮つて奮戦し、織田氏の總兵また反撃、今川氏の軍披靡す。松平氏の兵之を救はんとして、林藤五郎忠滿、小林源之助重吉奮戦し、松平隼人佐信吉、その子傳十郎信勝或は勝吉に作る討死した。

義元一旦岡崎城に入りて軍を整へ、信秀は上和田に退き、更に安祥に入った。此役信光以下を稱して小豆坂七本槍と呼ぶ。

天文十七年の三月に至り、義元の將大原雪齋、朝比奈備中守泰能、同藤三郎泰秀、岡部五郎兵衛元信(長教、眞幸にも作る)等、安祥城を攻めて織田氏の勢力を三河より驅逐せんとし、吉田、御油、山中、藤川

を過ぎて小豆坂に出づ、信秀之を聞き、その子三郎五郎信廣と安祥を出で、上和田に陣し、將に小豆坂を上らんとして兩軍測らず相遭ふ、時は十九日の事であつた。

今川軍の先陣朝比奈泰秀、まづ織田氏の將信廣の軍を突破れば、信秀麾下の兵を提げて今川氏の本陣に攻めかかり、逐ひつ逐はれつ暫し勝負をわけかねしが、機を見て岡部長教敵の側面に突入り、岡崎の將酒井雅樂之助正親（當時政家）等織田勢を突崩し、榊原彦内政成、今村彦兵衛勝長等奮戦す、信秀遂に支へかねて上和田に退き、信廣をして安祥城を守らしめて尾張に歸つた。

雪齋等は岡崎城に入つて滞留した。

一揆の勃發があつたその永祿六年十一月廿五日針崎勝鬘寺一揆と家康麾下の兵とこゝにて激闘を行つた超えて永祿七年正月三日土呂本宗寺の一揆と亦こゝに戦ひ一揆方石川新九郎佐馳甚五郎大見藤六郎等討取られ波切孫七郎は家康に二槍突かれて危く逃げ去つた。

今はこの小豆坂の西方に競馬場を設けまた羽根町より美合町につゞく道路新に開鑿せられ爲に小豆坂の丘陵中斷せられ懐古の面影の次第に薄れ行くを覺ゆる。

第二日のコース

省線 岡崎驛 10,400米
 名鐵 東岡崎驛 7,450米
 三鐵電車 井田停留所前 4,500米

瀧山寺 (額田郡常磐村大字瀧) 3,500米
 附、常磐神社、萬松寺
 本多忠勝誕生地 (同西藏岩津町) 1,000米
 岩津城 (同岩津町) 3,500米
 大給松平氏根據地 (東加茂郡松平村大給) 3,000米
 心月庵 (同盛岡村) 7,500米
 鈴木正三の事蹟

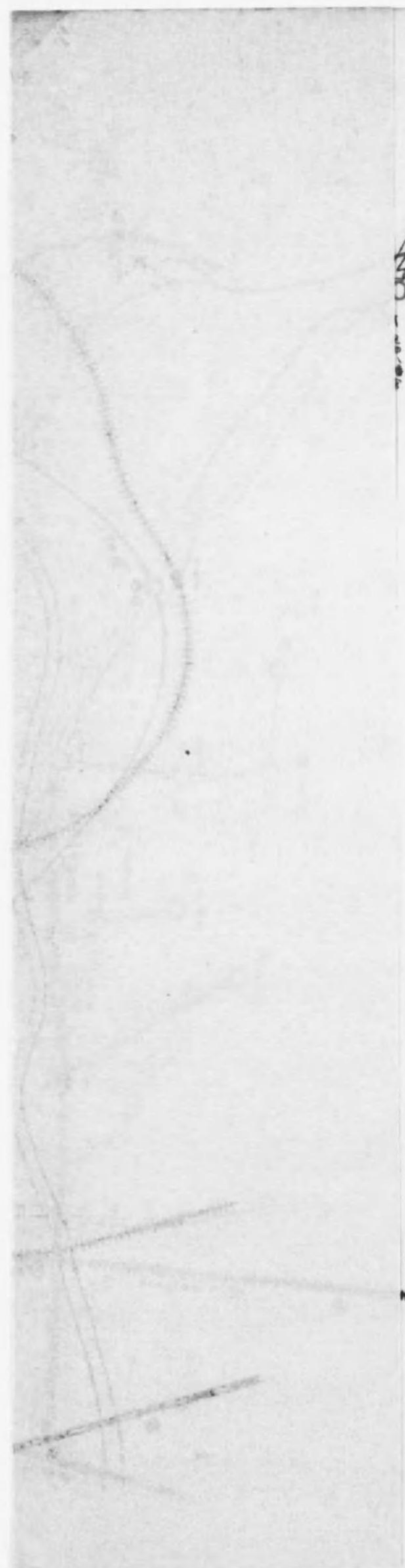
青山氏根據地 (額田郡岩津町百々) 3,500米
 信光明寺 (同岩津町) 1,000米
 仁木氏細川氏發跡地 (同仁木同細川) 3,500米
 高月院 (東加茂郡松平村) 3,000米
 足助八幡宮 (同足助町) 7,500米

二〇米
 足助神社(同) 足助町
 一八〇〇米
 舉母城 趾(舉母町) 舉母(金谷)
 一、〇〇〇米
 香積寺(同) 足助町

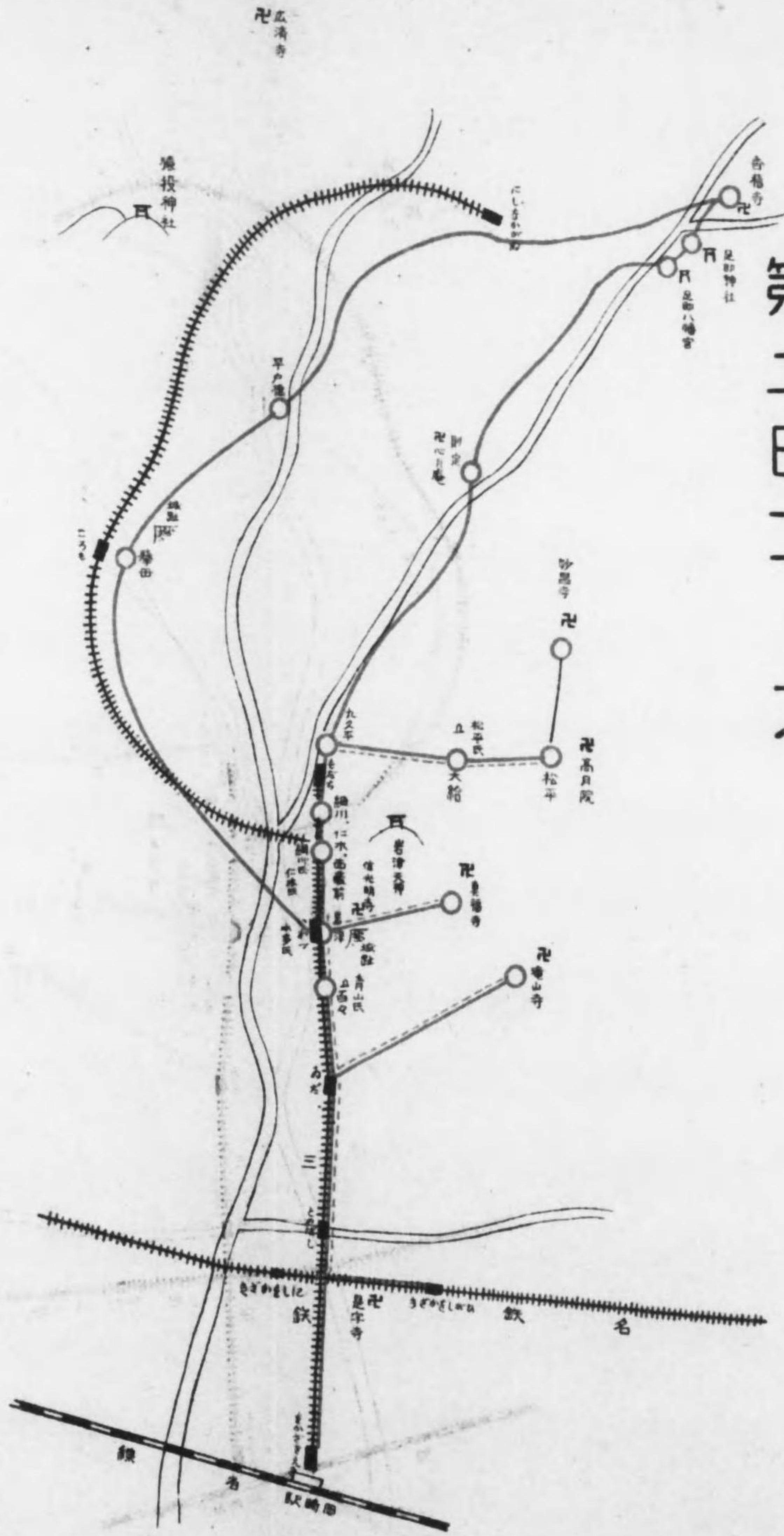
參考 探勝地

- 眞福寺 (額田郡岩津町眞福寺)
- 妙昌寺 (東加茂郡松平村梁山)
- 廣濟寺 (西加茂郡石野村石下瀬)
- 猿投神社 (同 猿投村猿投)

第二日コース



第二日コース



龍山寺

吉祥陀羅尼山藥樹王院と號し、天台宗、寺領四百二十石、東照宮領二百石。投行者小角が草創の靈地である。小角がこの吉祥の嶺に修行の時、附隨せる二僧があり、大聖小聖と稱へた。小角、或時この二人を伴ひて吉祥山の麓の流水を別け上ると、一つの瀧つ瀬があつた。その瀧壺から金色の光明を放つを見て不思議の事に思ひ、窺ひ見れば、大龍水底に在つて一の佛像を守護して居つた。是に於て、小角は袈裟を纏うて水底に入り、かの尊像を袈裟に包みて抱上ぐれば、これ實に藥師如來の尊像であつた。即ち之を巖上に安置し、速に此趣を奏聞したるに、勅使下つてやがて岩石を開き棒莽を拂ひ、こゝに堂舎を造營して藥師如來の尊像を奉安し、國家鎮護の靈場たるべしとの事であつた。時は實に人皇第四十代天武天皇の朱鳥元年六月八日であつた。(以上縁起のまゝを簡單にしるしあげたのである)

その後久しく荒廢したるが、人皇第七十四代鳥羽天皇の御宇、一七八〇年代保安年中に、加賀國の人佛泉上人永救、こ

の舊跡に尋入つて瀧側の舊礎跡に就き、堂宇を造營した。山に倚り谷に亘り、僧坊實に三百五十、朝暮利生方便を兼修し、靈驗甚だいやちこであつた。

本堂は、初め瀧のもとにあり、一間四面、正面は一丈二尺間、脇は一丈間であつた。次に中峯に移つた、これは内匠頭藤原範忠熱田大宮司季範の子で、從四位上内匠頭がある、從四位上内匠頭が一山の衆徒と力を合せて造つたもので、三間四面の柿葺であつた。時は近衛天皇の御宇仁平元年辛未年十月八日の事であつた。此時當山の四至を定めた。南は稻熊三ツ石を限り、西は廣石飛を限り、北は松板山を限り、東は阿世美を限ると。

次は後堀川天皇の貞應元年壬午年、滿山の衆徒が造營したもので、西峯白山峯とも云ふに移し、五間四面の檜皮葺であつた。此時三河守護左馬頭足利義氏が、額田郡や碧海庄や吉良東條西條等の人夫を沙汰して役に従はしめた。九月廿七日に抽入、寺中人夫五十人、惠那河内人夫廿人、額田郡山々寺々の人夫百三十人であつた。此時の大匠を美濃國平野庄太郎大夫橋宗重と云つた。十二月八日に棟上、此日義氏の室鎌倉執權北條泰時の女が附近の大小名を従へて參詣した。衆徒等、延年乱舞、夜陰に及んで本尊佛を移し入れた。嘉祿元年乙酉十月廿七

日供養。日光月光十二神將は、定禪阿闍梨が諸人に勸進して造立したもので、佛師八條法印雲慶、繪佛師和泉、正治元年八五九九月廿九日開眼があつた。

本堂の葺が朽損し來るによつて、建長六年一四一四子正月廿日に葺始め、同二月十四日に葺畢つた。匠工は美濃國郡上郡美田庄下田村忠大夫國眞であつた。

蓮華寺は、新御堂といひ、一間四面の堂宇であつた。惠心の作といふ釋迦三尊並に四天王の像を安置してあつた。熱田大宮司藤原季範の室の建立と云ふ。

鐘樓は、もと東谷の蓮華寺の辰巳の角にあつた。棟木の銘に、保元二年八七二丁七月一日棟上云々と。のち白山峯の本堂の辰巳に移し立て、後嵯峨天皇の寛元元年九〇三癸卯十二月二日に棟上をした。

惣持禪院は、鎌倉右大将頼朝の爲めに建てたるもので、本尊正觀音は頼朝等身の像にして、頼朝の鬢髪や落齒を納めてある。土御門天皇の正治二年に造始め、正治三年八六一（建仁元年）正月十三日に供養を遂げた。頼朝薨後第三年に當る。本尊並に脇士梵天帝釋は雲慶と湛慶の作であると。

三重塔は、後深草天皇の寶治三年九〇九己酉正月廿二日事始、同三月十八日に柱立、同十月廿七日棟上をした。眞柱の長さ下三丈七尺五寸、上三丈七尺、合せて七丈四尺五寸であつた。建長四年一一二二壬子十一月十五日に供養があつた。

法華堂は、寶幢寺と號した。後深草天皇の建長七年一一五五四月廿四日に事始、同六月六日上棟、同十一月廿二日供養。本尊阿彌陀佛は、高野山金剛三昧より迎へたもので、その佛身に左馬頭源義朝頼朝の父の骨を納めてあると。二王門惣門、又は解脫門とも云ふは、崇徳天皇の長承二年六月建立、のち龜山天皇の文永四年一一二七三月十三日に柱立し、同十一月廿七日棟上、同七年の四月七日から十日に至るまで供養を勤めた。二王尊の作者は雲慶と傳へて居る。丈各九尺七寸。その他、鎮守山王權現の社、常行堂、一切經藏等があつた。

かくの如くに、鎌倉時代に於ては、一山の隆運その極に達し、衆徒數百人、梵誦の聲山谷に徧して、武家をはじめ一般の衆庶の信仰も厚かつた、然るに南北朝より室町時代に及び、戦乱相踵ぐに至つては、寺領も掠められ、衆徒も離散し、堂宇の荒廢も甚しかりしが、江戸時代に寺領の朱印を下さるゝに至つて、やゝ舊に復したるも、いまだ往時の隆盛には及ばなかつた。明治の御代に入りては、また再び荒廢に歸し、

今存するものは本堂、仁王門、淨蓮院、觀音堂、鐘樓のみである。而して仁王門は明治三十四年三月二十七日に、本堂は同三十七年二月十八日に特別保護建造物に指定せられ、明治四十三年に大修繕を行ひ、現今亦修理に着手した。

什寶物

- 一 前立藥師如來 銅坐像丈一尺八寸 一體
- 一 日光菩薩 月光菩薩 木立像丈各五尺八寸 二體
- 一 十二神將 木立像各丈三尺八寸 十二體
- 一 不動明王 木坐像丈二尺 一體
- 一 毘沙門天 木坐像五尺 一體
- 一 聖觀音菩薩 木立像丈五尺八寸 一體
- 一 所謂源頼朝の等身拂と稱するものである。 木立像丈各三尺五寸 貳體
- 一 梵天及帝釋天 木立像丈一尺五寸五分 一體
- 一 不動明王 木坐像丈一尺八寸 一體
- 一 天台大師 木坐像丈一尺八寸 一體

一傳教大師

木坐像丈一尺八寸

一體

(以上本堂)

一觀音堂本堂十一面觀音菩薩

木立像丈三尺五寸

一體

一前立十一面觀音菩薩

木立像丈一尺六寸

一體

一慈惠大師

木坐像二尺九寸

一體

一延命地藏菩薩

木立像丈二尺四寸

一體

一千手觀音菩薩

木坐像丈一尺五寸

一體

(以上觀音堂)

一內佛殿本尊虛空藏菩薩

木坐像丈一尺九寸

一體

一彌陀如來

木坐像丈一尺六寸

一體

一不動明王

木立像丈一尺四寸五分

一體

一役小角

木坐像丈一尺七寸

一體

一釋迦誕生佛

銅立像丈五寸

一體

一三尊來迎佛

木立像阿彌陀佛一尺三寸
兩力士一尺二寸

三體

一阿彌陀如來

木坐像丈一尺六寸

一體

一降魔大師

木坐像丈六寸

一體

一歡喜天

木立像丈二寸

一體

一文珠菩薩

木坐像丈二寸五分

一體

一人丸

木坐像四寸九分
頓阿法師の作と傳ふ

一體

(以上淨蓮院)

其他本堂並に淨蓮院に在る、而、舍利、古文書類

一扁額本書

豎三尺二寸三分
紙地

一幅

一昇龍降龍

狩野探幽筆絹地

貳幅

一惣持禪院寄進狀

右衛門少尉高階

一幅

一織田信長書翰

一幅

一大般若經 宋版

參百卷

一鬼面 傳作者運慶

木製參頭

祖父面、豎一尺四寸、祖母面、豎一尺三寸、橫七寸五分、孫面、豎九寸五分、橫八寸

一菩薩面 作者不詳 豎八寸 橫五寸五分

木製八頭

一獅子面 作者不詳 豎一尺三寸 橫一尺五寸

木製貳頭

- | | | |
|------|---------------------|----|
| 一舍利塔 | 小松内、大臣重盛所持と傳ふ、舍利三粒入 | 一基 |
| 一馬裝束 | 源頼朝寄附之由傳來、赤色絹紐 | 八筋 |
| 一鞍 | 同上 | 壹個 |
| 一床几 | 同上 | 壹脚 |
| 一琴 | 淨瑠璃姫所持之由傳來 | 壹張 |

飛彈内匠塚 仁王門の傍にある。飛彈權守藤原光延塚と刻す。傳へ云ふ、當寺仁王門は飛彈内匠の建てたる所である、近國無双の門であつたが、如何なる事か、東南の角垂木壹本打違へたるを、傍なる姥之を見て、内匠の建てしにも過はありけるよと獨言云ふを聞いて、内匠大に恥ぢ、二仁門の二階より鑿を啣えて墜ち、咽を貫き死したるを、土民哀んで此所に葬り、塚を築いたのであると。

鬼塚 鬼面はいづれも運慶の作と傳へて居り、今は祖父面、祖母面、孫面の三種であるが、もとは父面、母面もあつたと云ふ、鬼祭に鬼の面をかぶらんとする者は、七日間齋戒沐浴して別室に起居するのであるが、或年祭の時、鳳來寺の山武士と稱する二人の旅僧が來て、吾々は常に諸國の靈場を巡行し、木食を爲すものである、決して身に汚穢なし、鬼面を吾等にかぶらせよと、無作法に父面母面を取つてかぶ

りたるが、祭終りてその面を脱がんとするに、顔面に粘着していつかな離れず、息つまつて遂に死んだ。土民面のまゝこれを藥師堂の側に葬り、名づけて鬼塚と稱へた。鬼祭の時五穀の炒りたるを塚の上に撒き、この五穀の芽の生ふる事あらん時出で來れと。この撒いたる五穀は、子供のおこりの妙藥として人々争て持歸る。

修正會鬼祭 鬼祭は、毎年舊曆元旦より七日間、藥師堂に於て天下泰平五穀豐穰を祈る修正會を行ひ、其結願の日の夕、即ち七日の晩に行ふのである。其起原に就いては今甚だ詳で無い。當山御宮勸請由緒記に「正保四年極月、江戸東叡山塔中青龍院亮盛へ、今年より毎歲瀧山寺に至り、天下安全の御祈禱勤修執行可仕旨、將軍御前に於て仰せ渡され、御手づから御昆布下され、道中人馬の御朱印、吳服、黄金等拜領す」と記せるが、既に古くより恐く瀧山寺の隆盛時代たりし鎌倉の頃に創められたるものが、室町時代の末期に至りて廢絶し、更に三代將軍の時に再興せられたものとすべきであらう。其後明治四年に至りて一旦中絶し、明治二十一年に復興し以て今日に及んで居る。さて結願七日の西の刻午後六時に至れば、學頭始め一山大衆、法裳七條にて、若徒二人、棒突八人を從へて出勤する。本堂番大役が往時は剃髮姿に

て、堂内佛事に關する諸事を掌る僧役、五石四斗の扶持米を受けて居つた。祭役谷の衆云々と呼び掛け、かくして鬼祭は始まるのである。現今は學頭の代りに住職が當り、大役は年行司が代つて務むるのである。

附 常磐神社

常磐神社は、もと東照宮と稱し、徳川家康公を祀る。瀧山御宮御由緒に曰く、人皇百九代後光明天皇の御宇、正保元年將軍家光公、酒井讃岐守(忠勝)、松平右衛門大夫(正綱)、青龍院亮盛の三人を召出され、權現様御誕生之地岡崎城の近所に御宮勸請遊ばされたく、幸、瀧山寺は古跡にして、岡崎要害の所、權現様御在城の節、御信仰の靈地なる故に、彼地に於て御宮勸請遊ばさるべき上意あり、即ち松平右衛門大夫を御宮地見分の爲め差遣はされ、正保二年五月御普請を始め、同三年九月御造營を終り、十七日に正遷宮、同年十二月十七日神領二百石を寄附せられたりと。以來數度の修理を加へ、瀧山寺住職を以て別當兼務せしが、明治六年四月神職の奉仕となる、大正五年十月二日、日吉社、白山神社、經津主神社を合併し常磐神社と改め、同八年五月廿七日指定村社に列せられた。

國寶 太刀 二振。

國寶目錄に、

太刀一口

銘正恒(青江)拵絲卷太刀

徳川家綱寄進

とある、これは大正三年四月に指定せられ、

太刀一口

銘長光

拵絲卷太刀

徳川家光寄進

これは大正十三年の四月に指定せられたのである。

附 萬松寺

萬松寺は慈應山と號し、曹洞宗の寺である。朱印二十石、岩津城主松平和泉守信光、當寺初代龍澤に歸依す。仍て永享十二年瀧村に於て七堂伽藍を建立した。普請奉行は久世石十郎永次、青山權之丞光教であつたと。長享二年七月二十二日信光逝去、當寺裏山に埋葬す(寺傳にはかくあれど、信光明寺にも、また信光の墳墓がある。萬松寺の方は分骨したものであらう)後、安祥城松平藏人信忠、永正十年制札の下附があつた。

永祿五年、徳川家康岡崎在城の砌、堂宇を修理し、慶長八年に及んで朱印二十石、並に七種の品を寄せらる。

この本尊臺座の銘に

慈應山萬松寺本尊

信心願主

松平和泉守源信光

傳法沙門

當山初住龍澤永源謹記

永享十二庚申年八月吉日

とあると參州本間氏覺書朝野舊聞哀稿所載に載すれど、今見當らず。なほ本尊前立釋迦如來臺座の裏に青山權之丞光教百々村の住人丹波篠山城主の祖の永享十二庚申年十月廿八日の願文をしるし、藥師如來畫幅の裏書は、文明十三辛巳年七月八日岩津入道常運のしるすものである。

信光の墓の外に、青山權之丞光教、青山喜大夫忠治、同善大夫長光、權大夫清治、喜大夫忠義、また久世石十郎永次などの墓がある。

門前の右脇に、光背を有する珍しき道祖神の石像がある。いづれよりか移したものであらうが知る人が無い。ふるくよりオコリ(瘧)を煩ふものが、平癒祈願に詣でたものであると。

青山氏根據地

岩津町大字百々は青山氏の根據地で、明和七年春三月丹波篠山文學關世美の撰並に書の、映峯授玉青山府君墓碑銘が建つて居る。青山氏は花山院大納言師賢文貞公の後といへど、そは詳でないが、清藏忠治、藤右工門光長の二代は、親氏、泰親に仕へ、やはり松平村に住せるものと思はるゝが、權之丞光教に至り、松平三代信光に随つて此地を領したのである。光教の子忠治、忠治の子長光、長光の子忠世、天文四年十二月十二日の井田野の戦に討死した。その子喜大夫忠義或は忠門の時、元龜二年四月二日遠江の一揆岡崎城を攻めんとして岩津に放火せる時、岡崎北口七手の一人として、内藤彌次右工門家長、能見松平右工門玄鉄等

と之を迎へ撃ち、眞福寺の鉄礮山てつぱうざんに於てこれを殲滅したるが、忠義も重傷を負ひて遂に死歿した。映峯授玉は忠義の法號である。その遠孫因幡守忠朝の時に至り、寛延元年三月八日、丹波の龜山城から篠山城に轉じ、五萬石を領して居つたのである。

本多忠勝誕生地

額田郡岩津町西藏前青木川の北岸火打山に石標が立つて居る。本多平八郎忠勝の父平八郎忠高、祖父平八郎のち吉左衛門忠豊、ともに藏前村に住んだ。本多家紀事に、忠勝君、高忠君御兩代共、參州額田郡藏前村に御住居あそばされ候山とある。忠勝はこゝに生れたのである。而して忠勝の時洞村今の岡崎市洞町に移つた。これも本多家紀事に、忠勝君御代同郡洞村へ御移りあそばされ、御屋敷跡と申所今にこれありとするす。

本多氏は、その先平八郎内記助時の時、はじめて松平二代泰親に仕へ、三代信光の安祥城攻の時、大手口より攻入つて功を立て、更に四代親忠に仕へ、井田野の戦に功があつた。その子平八郎助豊、五代長親に仕へ、今川氏の兵岩津に殺到するや、長親の軍の先鋒として多くの首級を獲た。のち六代信忠、七代清康に

歴仕した。その子が忠豊である。また清康に仕へ、尾張の岩崎品野の戦に従ひ、八名郡宇利攻の時、敵兵清康の扇の指物さしものを指して麾下に迫る。忠豊清康の馬前に奮戦して敵を退く、その功を賞せられて扇の指物を賜ふと云ふ。八代廣忠家康の父の時、織田彈正忠後のち備後守信秀、安祥城を陥る。仍て天文十四年九月二十日廣忠之を復せんとして安祥繩手に戦ふ。信秀大軍を率ゐて來つて安祥を援く。我軍前後に敵を受けて甚だ危し、忠豊乃ち廣忠の馬驗を乞ひ受け、廣忠に代つて討死した。その子忠高、天文十八年三月十九日、今川氏の將大原雪齋、朝比奈備中守泰能等と、安祥城を圍む。忠高先登、本丸に乗入らんとする時、城兵前嶋傳次郎の矢に中つて討死した。年二十二。忠勝は天文十七年の誕生なれば、父戦死の時僅に二歳であつた。叔父肥後守忠眞に養れて成人したのである。この叔父の忠眞も元龜三年十二月二十二日の遠州三方原の戦に討死した。

忠豊忠高戦死の所に、死節碑が建てられて居り、忠豊のは寛政六年秋七月、忠高のは寛政九年秋九月、共に大學頭林衡齋述の撰文である。

信光明寺

九〇

下總の國飯沼弘經寺の所化釋譽存同と云ふ者、參遠兩國を弘法して巡つて居つた。岩津城主の松平三代和泉守信光深く釋譽に歸依し、親氏泰親菩提の爲め一字を岩津城の下に建立し、釋譽を開山とした。此地はその昔彌勒堂ありしより彌勒谷と稱へたる地であつた。仍て山號を彌勒山といひ、寺號を信光明寺と稱へた。時に後花園天皇の寶徳三_{二二}辛未年の秋である。

堂塔房舎の造營、親氏泰親の墓を建てた。而して堂舎の全く完備せるは文明十年前後の頃と見えて、奉造立精舎一字云々と云ふ文明十年四月四日の棟札がある。こは法堂即ち祈禱堂建立の時のものと云ふ。寶徳三年より文明十年までは凡そ三十年を隔てゝ居る。かくて寺領として三千貫を寄進した。同十一年二月十三日に勅願所の繪旨を賜うた。同十一年酒井一家の菩提所として之を修復した。天文年中亦酒井家より修復があつた。

住持第二世は肇譽上人と云ひ、もと寶飯郡御津村大恩寺に住し、後京都知恩院に入つてその第二十四世と

なつた。第三世の超譽上人は松平四代親忠の五男にして、大恩寺に於て肇譽の下に得度した。永正十一年十一月十五日に至つて、後柏原天皇の繪旨に依りて超譽また知恩院に入つた。後七年再び當寺に歸住したるが、母皎月珠光尼の菩提のため、松平村に一字を建立した。高月院がこれである。(高月院に於ては超譽を中興と稱して居る)

超譽は、後、高月院に隱居したるが、大永六年四月七日後柏原天皇崩御の時御臨終の知識となり、同月二十日後奈良天皇より後柏原天皇御所持の阿彌陀佛影像一幅を下された。のち超譽はこれを菅生の滿性寺に譲りたる事は滿性寺の條に述べてある。

其後天文六年に廣忠惣修復を施し、同七年七月に信忠の五十回忌を營んだ。家康は永祿元年二月寺部陣の時、初めて當寺へ參詣があつた。元龜二年四月二日足助の土兵武田信玄の將秋山伯耆守信友、天野宮内右工門景貫に煽動せられて、岡崎城を攻めんとして岩津に亂入し、所々放火し、爲に當寺は御祈禱殿(法堂)並に寶物少許を残して悉く燒失した。

天文元年に至り、家康再建を命じ、再び先きの壯觀に復した。慶長七年六月朱印百二十石八斗二升を下した。

寛文三年十二月に當寺住職に常紫衣の綸旨を賜うた。
三代家光將軍が法堂に修復を加へ、正保四年五月十九日に工を竣へた。その後しばらく修復が行はれた。
唐門は岡崎城主水野監物忠善の寄進によりて万治二年九月に成つたものである。

佛像、佛畫

- 一 法堂 釋迦佛立像 三尺九寸 傳、傳教大師作
 - 一本堂 阿彌陀佛坐像 一尺九寸 傳、惠心僧都作
 - 一 居間 阿彌陀佛立像 二尺八寸 傳、慈覺大師作
 - 一 阿彌陀佛立像三尊 中尊九寸七分 二菩薩六寸 厨子入
- 彼の有名なる銅鑄の信光の願文は、この居間に安置せる阿彌陀三尊立像の臺坐に納められてあつたものと云ふ
こは信光の守本尊にして親忠へ譲り、親忠よりまた超譽へ譲れるものと。寺記に曰ふ、御願文は信光公御持念
佛臺座之内へ、赤金に御彫付御納有之、當山第一の重寶に候と。
- 一 八幡宮本地 阿彌陀佛立像 一尺 傳、聖德太子作
 - 一 阿彌陀佛立像 二幅
 - 一千體阿彌陀佛 一幅

一 阿彌陀佛三尊

一幅

一 笈 開山釋譽、諸國教化の際におひしものと、内部三段に分る。

建造物は

- 一 法堂 本堂 方丈 居間 茶間 庫裏 鐘樓堂 中門 惣門 八幡宮
- 一 棟札 文明第十戊戌年卯月四日 寛文六丙午天七月十五日 万治二己亥天九月十五日
- 雲版
- 表に 實相知足院 裏に 正長己酉歲九月念九日

(正長二年は即ち永享元年二〇八九年)

三代の墳墓

法堂即ち觀音堂の北の丘上に在り。親氏(芳樹院殿)泰親(良祥院殿)の二代の墓は信光の建てたるものである事は先に述べた。信光(崇岳院殿)の歿後こゝに葬り、その墓は親忠の建てたるものである。親氏泰親の墓は高月院にも在り、信光の墓は瀧の萬松寺にもある。親忠の大樹寺を建立するや、更に三代の墳墓をその西域に建立した。元祿十一年の殿堂修理の際、この三代の墳墓にも修復を施した。

信光銅鑄の願文

こは有名なるものなるを以て、
その全文を揚げ置く

奉

祈願

觀世音菩薩

阿彌陀如來

大勢至菩薩

三尊現當二世御

利益深、諸人願望

叶給誓者哉、予

年來願望、成就、剩

安祥岡崎二城無二

一戰二而入手、偏御方

便加護力也。故爲三謝

禮一加三增信光明寺於

佛供料一而永樂三

千貫、永代寄二附
之一又子々孫々主從
至迄、自今可レ飯二依淨
土宗門一條、告誡相
定畢。願入道子孫
領二一天下一源氏武運
長久、萬々年後彌
勤世迄繁昌、二世
御利益施給奉
レ願者也。仍如レ件
文明十八年
七月 日
願主
松平入道源信光敬白

(因に云ふ、調點等は編者の施したるものである)

岩津城趾

九六

松平三代和泉守信光が、松平村より岩津に進出したるは應永二十八年の事で、この年の八月十五日の夜、岩津の郷族中根大膳を襲撃してその城を奪つた。大膳の城は矢作川に沿ひたる村社若一神社の東に當り、後世まで字に大膳の名を残した。つゞいて信光は、大給や北給保の長坂、山下などの郷族を撃破して、岩津山上に城を築いた。今城山と呼んで居り、土居空濠の趾が明に存して居る。眺望廣淵、矢作川は洋々として脚下を流れ、尾參の平野一眸の中に集まり、依稀として勢濃の巒峯が雲かと望まる。信光は幾度もこゝに立つて、西參平野を併有する、方策を運らした事であらう。

信光はまた更に山下に七ツの砦を構へて我一族を置き、以て牙城の衛護とした。いざと云ふ場合には、本城に籠つて防禦の陣を張り、機を見て山を下つて突撃せんと圖つたものと思はる。

七砦とは、一は松平備中守親則の砦。岩津の妙心寺今山福寺は、信光がその室眞淨院とこの親則との菩提のため建てた寺である。親則の砦を妙心寺古城とししてある。妙心寺境内に在つたものであらう。二は岩

津源五光則の砦。村の西に在りとしるす。今明で無い。三は松平彌四郎信守の砦。四は岩津彌九郎長勝の砦。五は岩津八郎五郎親勝の砦。六は岩津源三或は源四郎算則の砦。是等の砦すべてその所在が明で無い。七

は岩津大膳入道常連の砦。妙心寺裏の古城としるす。中根大膳の舊城かと思はる。岩津古城蹟の圖江戸中期頃と云ふものに、井ノ城、上城、新城、壇ノ上城などしるし、妙心寺北裏にも城趾を畫いて居る。妙

心寺裏には今なほその趾を存し、岩津字於御所おごころ近くの街道の東に、古城蹟圖に云ふ新城、また上城の趾と思はるゝ土居や空濠が存して居る。

是等の砦を守る者は、すべて信光の子か或はその一族である。大樹寺に藏する元龜元年八月十六日の松平一族十六人の連判狀に、源五光則彌四郎信守、彌九郎長勝、源三算則、大膳入道常連、八郎五郎親勝の名が見えて居る。

この外、岩津のすぐ南の磯部に丸根と稱する砦があり、これに丸根美作守與七郎家勝が居り、岩津の少し北の細川にも砦を置いて、細川次郎親世が居つた。共に十六人連判中の人である。また磯部の南隣の東藏前には、内藤彌次右衛門家長の住めりと云ふ城趾がある。家長は永祿元龜の頃、岡崎の北口を守る七人衆の

九七

一人であつて、彼の關ヶ原戰前の慶長五年八月朔日、伏見落城と共に討死した人である。城山の北の高地に鎮座ある岩津天満宮は、芭蕉天神と稱して、寶曆九年信光明寺第廿二世一譽上人の勸請に係る。參河名勝志に「信光明寺境内後の山にあり、當寺先代人伊豆國芭蕉天神に信仰厚く、寺境の内に一社を創造し、乃ち芭蕉天神を勸請し奉り、後今の所に移し奉ると云ふ。天神の由來を尋るに、往古久我大納言、駿州富士淺間宮へ奉幣司の命を蒙り下向し玉ふに、途中はからず痛痛病に罹り薨玉ふ。其時供奉せし者に伊豆國産のものあり、公の薨じ玉ふを悲哀し、御裝束を受領し、伊豆の國へ持歸り、芭蕉山に埋め天神と崇め奉ると云ふ。芭蕉山に在るを以て後世芭蕉天神と稱し奉る云々」といふ如き傳説を載せてある。

岩津町大字岩津から、仁木、細川など足利氏に縁故深き村々を過ぎて松平村松平へ向ふ。足利氏の始祖陸奥判官義康の曾孫に實國があり、仁木太郎と云ひ、その弟の義季を細川二郎と稱し、こゝから出たのである。實國の後に右京大夫義長があつて三河の守護職となり、岡崎城を開いたる西郷氏の祖先は仁木氏の守護代であつた。また義季の後の讃岐守持常や、讃岐守成之などが、やはり三河の守護職となつて居つた。

東加茂郡に入り、松平村大字九久平から右折すると松平に入るのであるが、その松平に到る途中、西の方即ち右手の方を大給と稱し、大給松平氏の據つた所である。大給松平氏は、松平第四代親忠の二男加賀守乗元より出て居る。乗元の子乗正、その子乗勝、その子親乘、その子眞乘、その子家乘までこゝに居つたのである。代々源次郎と呼び、親乘の時、はじめて和泉守を稱號とした。その遠孫和泉守乗佑の時、明和元年六月二十一日大阪城代となり、從四位下に叙し、この日出羽山形から幡豆郡西尾城に轉じ六萬石を食み、以て明治維新に及んだ。而して直乘の二男縫殿助直次は、額田郡奥殿岩津町に居り、代々こゝに居所を構へ一萬六千石を領した。賞勳局總裁たりし大給恒はこの後である。

高月院

貞治六年二〇二七（後村上天皇正平二十二年）七月二日創立、

はじめは寂靜寺と號し、開山は見譽寛立。寺記に、寛立は足助次郎重宗の二男重政とある。尊卑分脈足助氏系圖には、三郎重宗がある。この人ならば次郎重範と共に京都六條河原に斬られて居る。當院諸記録に

は、寛立は永和三年二〇三（後龜山天皇の天授三年）十一月廿五日に寂せるやうしるす。果してこの重宗の子か譽見寛立なりや否や今明にしがたい。

松平氏の初祖太郎左工門親氏が松平郷に入るや、深く寛立に歸依し、その林添、麻生、二重栗。田口、奥岩戸、秦梨、柳田等、所謂中山十七名を従へて松平氏の根柢を樹つるや、永和三年二〇三本堂諸院を再建し、安阿彌作の阿彌陀佛を本尊とし、本松山寂靜寺高月院と改め稱へた。浄土宗。親氏應永元年四月廿四日に歿し、當院二代の淨譽閑的が導師となり、高月院の境内に葬つた。元來この親氏の歿年については十數説もあつて詳でないが、九月廿日或は四月廿日となすものが多く、廿日といふ日附は一致して居るに、高月院のに限つて廿四日となすは不思議である。ともかくこの歿年は高月院に祀る位牌に據つたものである。

親氏の次は泰親である。同じく太郎左工門と稱した。泰親は親氏の子とも弟ともいへど、弟の方が正しいやうであるが、泰親の歿年を高月院の傳の如く、永享二年八月廿日とせば、親氏の歿年を去ること三十七年ともなつて隔り過ぎて居る。尤も泰親の歿年も區々にして一定して居らず、ただ月日は九月廿三日となすものが多いやうである。泰親また松平を根柢地として、或は大平郷岡崎市大平町に、或は岩津方面に進出し、

ます／＼武威を布いた。歿後親氏の墓の左側に葬つた。四世の實譽良傳が導師となつた。親氏の法名は芳樹院俊山徳翁、泰親は良詳院秀岸祐金。

當院七世實譽存牛は、松平四代親忠の五男にして、五代長親の弟である。初め實飯郡御津村大恩寺の住持知恩院二十 堅譽四世となるの下に得度し、岩津の信光明寺の第三世の住職たりしが、永正十一年十一月十五日に後

柏原天皇の勅によりて知恩院に入つて第二十五世となつた。七年の後再び信光明寺に歸住したるが、その母皎月光尼永正三年八月廿二日歿のために高月院を中興しこゝに入つたのである。月光尼の墓は親氏の墓の右側

に在る。閑照院皎月光と號した。大樹寺の塔頭信樂院にも墓がある

閑照院は、賀茂郡矢並今、西加茂郡高橋村の鈴木左京進重勝の女である。鈴木氏は本姓穂積、紀州熊野八庄司の一

人で、早くから源氏に屬して居り、庄司重倫は平治の乱に戦死し、その遺子二人、鈴木三郎重家、亀井六郎重清、共に源義經に仕へた。重倫の弟重善、はじめ平内大夫と云ひ、また刑部左衛門と呼ぶ。姓二人の

後を追うて奥州に下らんとしたるが、道塞かりて通せず、遂に矢作の宿に留り、高橋庄矢並郷に入り、入道して善阿彌と稱した。その後が、矢並、寺部共に高橋村九久平、酒吞共に松平村則定盛岡村また足助方面に繁延し、

更に碧海郡、八名郡にまで及んで居る。

さて五代長親も、また高月院へいく度も田島を寄進して居る。その賣券や寄進状が當院に存する。こはやはり亡母菩提の意味からである。

當院の傳には、天文十八年十一月十日に家康當時竹千代八歳の時、尾州より駿府へ赴くに當り、當山へ參詣したる由をしるせど、こは明にしかたない。安祥城は今川勢岡崎勢のために十一月九日に落され、城將の織田三郎五郎信廣と相換へられて、家康の岡崎城に入つたのは早くとも十日である。而してその駿府に送られたのが同じ月の廿七日或は二十二日であるといふ。この僅少の日時と、いそかはしき日を送る間に、こゝまで來り詣づる違があつたであらうか、暫く疑を存し置く。

なほまた永祿三年二月或は春に、家康が當山へ參詣し、親氏泰親珠月尼の墳墓を拜み、中門前に松一株を手植せりと傳へて居る。家康が桶狭間戦後、永祿三年の五月廿三日に岡崎城に入るや、直に活動を開始し、この五月の末に刈谷城を攻めて、十八町畷や石ヶ瀬に戦ひ、引つゞき、舉母、梅ヶ坪、廣瀬の攻撃を開始して居る。梁山妙昌寺に年號はしるさゞれど九月日の家康當時元康の禁制がある。然らばこの方面にも活動の

餘勢を及ぼしたるものと思はるゝにより、此時の當山參詣は恐く事實であらう。然し二月又とあるは誤である。この松は文化十三年閏八月三日四日の暴風雨に倒れ、今は二代目であると。慶長七年正月家康當寺一山の條規を定め、慶長八年六月廿八日寺領百石の朱印を付した。

寛永十八年三代將軍家光、堂宇の惣修覆を行ひ、その後寛文五年、元祿元年、つき／＼に修覆が行はれた。

寶物

- 一本 尊 阿彌陀佛 壹軀 親氏寄進 安阿彌作
- 一佛舍利 壹塔、親氏寄進
- 一岩谷觀音 金像壹軀。親氏家門繁榮天下一統せん事を祈念の尊像。親氏寄進
- 一地藏尊 木像壹軀。六所神社本地佛。親氏寄進
- 一三尊彌陀 金紙金泥の畫壹幅。泰親寄附
- 一三尊彌陀 木像壹基。長親寄附。熱覺大師作
- 一辨才天 唐筆壹幅。長親寄附
- 一茶臼 壹組。竹に虎の浮彫。新田家累代傳持の品。長親寄附
- 一野風呂 壹棹。親氏遊山の具。親氏寄進

一 仁王木像 貳驅。親氏直作。天下峰の勸請。正徳年間より當寺に鎮藏す
 一 寄附地証文 大永參年正月十一日道闕より(長親のこと) 壹卷
 一 全 大永七年正月吉日道闕より (長親のこと) 壹卷
 一 寶渡証文 大永貳年三月十三日信長より 壹卷
 一 全 大永四年正月十一日買主道闕より(長親のこと) 壹卷
 なほ松平家の家寶に親氏法體坐像一尺がある

親氏が鬼門鎮護として奉齋せりと云ふ六所神社(塩竈六所大明神)宮口村六所山は今縣社であるが、こゝに道闕五代長親六代祐泉六代信忠の連署せる六所大明神社殿造營の奉加帳がある。

足助町に入る途中足助川に架したる穂積橋を北へわたると、そこは則定村盛岡村であるが、こゝに心月庵と稱する草庵がある。この庵に井原西鶴の浮世艸子の現はるゝ以前、儒佛の教を小説に記したる假名草子の作者として有名なる鈴木正三しやうざんの木像がある。またこの奥の元山中石野村の石平山恩眞寺にも木像があり、墳墓がある。正三はこの則定鈴木の人で、通稱九太夫、はじめ家康に従つて、關ヶ原戰や大阪陣に戦功があつたが、生來禪を好み、元和六年に至つて遂に髮を剃つて俗名のまゝ正三と稱へ、石平道人、また玄々軒とも號し、還つて恩眞寺に住し、仁王坐禪法を創めた。のち江戸に出で、四ツ谷重俊院を開き、淺草の天徳

院の側に了心院を結んで住んだ。その作中、因果物語、二人比丘尼が最も著名である。

郷社 足助八幡宮

祭神は品陀和氣命應神天皇帶仲日子命仲哀天皇息長帶比賣命神功皇后等の七柱。

八幡宮縁起に、天武天皇の御宇の創立も同四年ともと云ひ、往古は賀茂總社八幡宮と呼び、一郡の崇仰を集めた。聖武天皇の御宇、神宮寺を建立して藥師佛を本尊とした。嵯峨天皇の弘仁七年六月に若宮を本社一四七六の左側に建て、弘仁十三年八月にはまたその傍に猿投大明神を勸請した。仁明天皇の承和八年八月に熱田の八劍宮を祀つた。源賴朝が後鳥羽天皇の建久八年四月に庄園を寄進して神領とした。仍て土御門天皇の建仁元年一八六七に結構を盡して社殿の造營を行つた。また土御門天皇の承元元年一八六七にはじめて放生會を執行したと云ふ。順徳天皇の建保元年一八七三には、源賴朝の影像を寫して神祠に納め、今宮と號したと傳へて居る。これ當社を中興したるに因てあると。

その後松平氏の初祖太郎左工門親氏、並に二代の同太郎左衛門泰親、共に崇敬の誠を捧げた。當社に應永

二〇八〇
二十七年十一月八日徳阿彌と奥書のある大般若經第九十卷を蔵する。徳阿彌は親氏が時宗の僧となつて流浪せる折の名である。後土御門天皇の文正元年十一月に社殿の造營を行つたのは、恐く松平氏の手によつたのであらう。元龜二年四月武田信玄の足助城を攻撃せる時兵火に罹り、天正十六年十二月に再建の工を竣へた。その後時々修復を行つた事と思はるゝが、江戸時代の棟札は天和二年戊五月吉日のが存するのみである。本殿は明治四十年五月廿七日特別保護建造物に指定せられた。

龍王古面 裏に白鳳四年の銘ありと

御由緒書一卷は、延寶六戊午年二月鈴木三郎九郎重祐が、竹内彈正大弼惟庸、今城右中將定經、高辻侍従長量、山科右中將持言に依頼してしるしたるものである。別に古縁起一冊がある。大般若經第九十卷の奥書は、三河國賀茂郡足助庄奥下山郷。右神宮般若經也。應永廿七年十一月八日徳阿彌とある。この社殿に懸けられたる繪馬は、江戸時代初期から中期にわたつたもので優秀なるものが多い。

一扇的打圖 縦三尺、横四尺

墨書銘。奉納扇的打。慶長十七壬子年、尾州稻留流先生、當國住岩神村澤田四郎右衛門尉、行年七十八歳

一神馬之圖 縦二尺一寸、横三尺一寸

墨書銘。諸願成就皆全満足。慶長十九年五月吉日。添札書、此獻畫、慶長十九年獻尊神、星霜重畫縁額磨滅、因今復新補綴獻之。文化十一龍次甲戌。當處

一浮世繪美人圖 縦一尺三寸、横一尺八寸

墨書銘。田振村林氏

額裏書。御寶前。元祿十一とら八月十五日。ふちむら 林氏

一六歌仙 慶安五年壬辰

一双鷹 明曆四年四月十五日

一白鷹の畫の額 二個 寛文六年五月
寛文七年正月

一字治川合戰 寛文〇年

一七福神 寶永二年

一一ノ谷合戰 享保十一丙午歳 等

無格社 足助神社

笠置山の弓勢に北條勢の膽を寒からしめたる元弘の忠臣足助次郎重範公を祀る。

足助八幡宮の東の境内に在る。明治二十四年七月二十三日。特旨を以て重範に正四位を追贈あらせられたるを以て、足助町はもとより東加茂郡内の人士深く感激し、相謀つてまづ明治二十五年二月、時の内務大臣従二位勳二等子爵品川彌二郎氏の撰文たる眞弓山城墟碑を、重範の城趾眞弓山上に建設し、明治三十五年二月足助神社を創建し、三月十七日に勸請、七月廿三日に奉告祭を舉行した。更に昭和八年五月二十六日に従三位を追贈せらるゝの御沙汰を拜するに及び、一同の感激その極に達し、直に奉告祭を執行し、神苑の整理、神殿の造營、社格の昇進寺につき、今や着々準備中である。

足助氏は、鎮守府將軍源滿政六孫王經基の二男の後である。その八代の孫重長、賀茂六郎と云ひ、足助右兵衛尉と稱し、これより代々足助に住す。昭慶門院龜山天皇の皇女喜子内親王御領目錄に、高橋庄、高橋新庄がある。足助の地は高橋新庄に當る。足助氏は恐くこの皇室御領を御預りしてゐたものであらう。さればこそ世々特に忠義の心が厚かつたのである。祠前に立てば、眞弓山東に聳え、巴川の流涼々として古を語るものゝ如くである。

香積寺

飯盛山と號し、曹洞宗。

寺傳に云ふ、正慶年中後醍醐天皇の元弘年中關白二條良基後普光亂を避けて當郷に入り、眞弓山の城主足助次郎重則に頼る。重則新殿を構へてこれを置く。今の御所山普光寺の境内がそれである。このあたり弘く成瀬と稱したるを以て、成瀬の御所とも云ふ。重則我が女を以て良基に侍せしむ。重則の女懷妊してやがて男子を生む。これを成瀬の君三吉丸と稱した。これ成瀬氏の祖であると。寛政重修成瀬譜には、關白良基流浪して足助社に寓居し、二子を生む。長子を公達、二男を基久と云ふ。二子足助庄成瀬郷に住し、成瀬を以て稱號とすとある。さて曆應年中に至り良基京に歸らんとする時我が念持佛弘法大師作の正觀音の金像を、日來歸依する巨嶽和尚に托して去る。巨嶽即ち岩神村今盛岡村字川見山に堂宇を建て、これを安置した。然るに白峯祥瑞當寺一世更に今の地に堂舎を建立し、飯盛山香積寺と稱し、正觀音像をこゝに移して本尊とし、三吉丸法號天映寺實山徳延を開基とした。時は應永三十四年の事であると。良基は嘉慶二年二〇四八南朝の元中五年六月十三日薨去。その裝束を遺物として當寺に送り來る。今裝束塚がある。

重則の女は應永七年八月十日に逝去、良性院華室貞芳と云ひ、當寺に葬つた。

足助次郎重則は、重範の事か、重範は元弘元年に既に京に在る。笠置山の戦は元弘元年九月三日であり、重範が六條河原に斬られたるは元弘二年五月三日である。また良基の嘉慶二年に薨じたる時の享年は六十九歳であつたと云ふ。正慶年中より嘉慶二年まで凡そ五十六七年を距て、居る。されば萬一三河に来れるものとせば、年十二三歳の時の事となる。この邊すべて正史に合つて居らぬ。

それはさておき、室町時代に及んでは、足助に據つた足助鈴木氏の菩提寺となり、鈴木石見守政勝或は忠親或は朝鈴木越後守重高、同越後守重直或は重長同兵庫頭信重、同喜三郎重顯、同伊賀守康重等の位牌があり、墓がある。當寺と松平氏との關係については今明で無い。

その後一時廢頽したるを、永正元年に四世勢雲が再興した。然るに元龜二年四月十五日武田氏の兵火に罹り、堂塔舊記悉く灰燼に歸した。その後造營の事があつたのであらうが今記録が無い。江戸時代には、足助の領主本多淡路守忠周ちかふ以來の歸依があつた。寛永元年に山門を建て、延寶二年に庫堂、惣門を建て、寶永五年には、法堂、庫院、祖師堂、僧堂、衆寮、經藏、寶庫等を再建した。なほ享保四年には開山堂、位

牌堂。文政三年には、禪堂、衆寮、廻廊、鐘樓等を再興した。

彼の繪畫に有名なる風外本高和尚は、當年の二十三世であつて、伊勢の人、天保四年四月廿八日に大阪天満園通院より入り、天保十一年に退院、大阪の烏鵲樓に隱居し、弘化四年六月廿二日に大阪に寂したのである。當時にその筆に成る畫を多く藏する。

一 略縁起 奥書に元和五己未年八月十三日とある。

一 歴代年譜

一 香積寺過去帳

一 湯口 銘に三川為賀茂郡足助庄飯盛香積

一 領守御寶前、永祿二己未四月吉日相越寄附之とある。

舉母城趾

ころもの名は甚だ古し、古事記垂仁天皇の段に「御子大申津日子命者許呂母之別之祖」また「次落別王者三川之衣君之祖」ともありて、西參河をひろく指したるものゝやうである。今もなほ碧海郡と知多郡との

間の灣を衣ヶ浦と呼ぶのはその名残であらう。而して後世ころもと呼びし地は矢矧川沿岸の臺地をいうたのである。

今の下學母の町は、江戸時代に城主が陣屋を置き、又は城郭を築くに及んで開けたのである。

城址は字舊城と、童子山舊道場山、また天神山との二個所にある。天正十八年徳川家康が封を關東に移すに及び、田中兵部大輔吉政が學母をも兼帯して居つた。慶長九年十一月に三宅惣右衛門康貞が武藏の瓶尻みかじりより移り、始て陣屋を構へた封一。これは舊城の地である。その子越後守康信、元和五年秋勢州龜山に轉す封一万。康信の子大膳亮康盛、亦學母に移る。康盛の子土佐守康勝、寛文四年五月田原城に轉じ、その陣屋址に倉廩七棟を置き、幕府の代官鳥山牛之助精元、四郷村に在つて之を管した。この時矢作川の水害を防ぐ爲に新堤を築いた。その形狀曲尺かねの如くであつたから曲尺かねの手と稱へた。天和元年九月、本多長門守忠利奥州磐城白川より來り、陣屋を設く封一。其子山城守忠次、忠次の子長門守忠央、寛延二年二月遠州相良に轉じ、内藤丹波守政苗みつ、上野安中城碓氷郡碓氷より移り來り封二。幕府より資用金四千兩を賜ひて始めて城を築く。然るに水害のため城櫓全く成るに及ばずして更に新城を童子山に築き、此城地遂に廢墟となる。城址の四周濠渠の

跡が水田となつて存して居り、石を以て疊み上げた高さ約貳拾尺程の櫓臺や、南隅に石垣が残つて居る。童子山の城は、安永元年政苗の子左近將監學人まなぶの築く所、樹木臺と稱す。山城守政峻みちたけ、山城守政成、丹波守政優、山城守政文、山城守政これに居つて明治二年に及ぶ。明治四年十一月城郭を撤して公賣に附し、其形を失つた。

金谷の城は學母町金谷字外籠に在る。鐵路工事のため舊形を失つて僅に濠の跡を存するのみである。古く學母城と稱するは此城の事である。金谷の名は慶長五年よりである。

鎌倉時代から中條氏がこれに居つた。中條氏は粟田關白藤原道兼の後である。尊卑分脈の中條氏系圖に、出羽守景長が延慶年中衣城に住むとあり、延慶は花園天皇の年號である。猿投神社に延慶二年三月廿五日の景長の寄進狀がある。その弟が備前守秀長で、建武四年十一月十五日、文和三年七月廿三日の寄進狀がまた猿投神社に存し、室町時代には高橋庄三十六郷の地頭たりし事の記録があり、當地方の一勢力たりし事が知らるゝ。長興寺はこの備前守秀長の開く所である。境内にその墓もあり、位牌もある、寄進狀もある、これより代々この地に住したのである。永祿元年二月家康當時元康初陣の時に、攻めたる學母城も此城で

あり、永祿三年五月桶狭間戦後に攻めたのも、永祿四年二月に攻撃したのも皆此城である。永祿四年閏三月に織田信長の爲に攻められ、當時の城主中條出羽守常隆城を棄て、逃る。信長佐久間右工門尉信盛を置いた。長興寺に信長の畫像を寄進したる余語久三郎正勝は、信盛の後を繼いでこの城に居つたのであらう。江戸時代に至つて全く廢せられた。

長興寺

集雲山と號す。舉母町大字長興寺字寺地に在り、臨濟宗。

建武^{一九九五}二年正月中條備前守秀長の開基であり、京都東福寺開山聖一國師の弟子大陽義冲を開山とした。塔中拾八院あり、また境内に十勝を有し、堂々たる大伽藍であつたが、永祿十年織田信長の兵燹に罹りて本寺と共に焼亡し、院號はたゞ地字に存するのみである。永祿十年に信長此地方に軍を出したる事、今、明で無い。この時は家康が三河平定の後である。今の堂宇は信長がその臣余語久三郎正勝に命じて再興せしめたものであると。

貞和四年九月十八日中條秀長の長興寺領寄進狀。永徳元年八月六日後醍醐天皇の御證文(寫)。天文二十三年十一月三日佐々木治部大輔定書(寫)。天文二十三年十一月三日治部大輔寺領寄進狀。慶長九年五月十六日右大臣徳川家康住持職の事。大陽和尚畫像。智海禪師畫像。その他吳道子。把殿司の佛畫。

天正十一年六月二日余語久三郎正勝寄進の織田信長畫像は、昭和十年五月二十三日國寶に指定せられた。

〔参考〕

眞福寺

靈鷲山降劍院と號す、天台宗、舊寺領、三百五十四石七升。

未だ我國に佛教の渡來前の天皇二十五代仁賢天皇の御宇八年六月朔日に、八尺の利劍が此山に天降り、光明赫奕たるものがあつた。其後幾星霜を経て石泉と云ふ人あり、利劍の威徳のいちじるしき由を傳へ聞いて、此山に尋ね入り、利劍の神靈本地垂迹を示したまへと祈願を籠ると、威儀嚴然たる十二神將が現はれ、告げて云ふ、われはこれ利劍の神靈である、後、こゝに佛神の出現せられるに依り、まづ來つて靈地を主護するのであるぞと、その後、天皇三十四代推古天皇の御宇、眞福まふちといふ人があり、仁木の郷に來て、柴の庵を結び、苦行三昧に入つて居つたが、或日此山に靈光のかゞやくを見て、尋ね求むるに、山上に清泉があり、その傍に楊柳一株ありて、光明あたりを照し、美香四方に薫じた。眞福しばし瞻仰して居ると、忽ち水中に微妙の聲ありて、是好良藥今在此と誦し、藥師如來の姿が影の如く顯はれ、また水中に消えた

れど、是好良靈の妙音は絶ゆる事が無かつた。眞福感涙を流して、光明も、影像も、法音も、すべて此靈水より出で、また靈水中に納まる上は、靈水即ち藥師如來の全身なる事疑なし、今より此水體藥師如來に歸命し、この靈水を本尊として一字を建立せんと、水體藥師如來出現の瑞祥を奏し、佛闍草創の懇願を言上せしにより、聖德太子は深く感じ給ひ、藥師如來の誦し給ひしは、法華經第六の卷如來壽量品の文なれば、釋尊に因みて靈鷲山と名付くべく、八尺の利劍の降りしによりて降劍院と號すべく、寺號は本願眞福の名を取りて眞福寺と呼ぶべしとの事であつた。

かくて眞福は、石を曳き山を平げ、五間四面の檜皮葺寶形造の佛殿を建立して、水體藥師如來の内々陣と定め、更に多くの僧房を興した。而して彼の利劍の神靈十二神將を八所權現四所護法の神として鎮めまつた、所謂鎮守の神である、時に住僧の中に玄運と云ふものがあり、一千日の間勇猛精進の修行怠らず、願行満ちて内々陣に入つて水體藥師如來を拜し、靈水少許を淨銅瓶に移し來り、一滴を衆生に施して三毒煩惱の重病を癒さんといった、これが山籠行者の元祖である。その後寺運ますます隆盛、聖德太子四十六院の一として、はた又當國最初の寺院として參籠するものいよゝゝ多くなつた。(以上緣起に據つて大要をし

るしたのである。然るに開山眞福建立の本堂は、五百五十八年を経て、人皇七十六代近衛天皇の御宇仁平元年^{一八一}辛未二月二十四日に炎上した、二回目建造の本堂は、丈間九間に五間であつたが、二百五十九年を経て、人皇第一百一代後小松天皇の御宇應永十七年^{庚寅}二月二十七日に、本堂、惣門、食堂、三重塔、常行堂、法華堂、彌勒堂、證菩提院、持地院、慈惠大師堂、弘法大師堂、護法堂、八所社、若宮、白山社、山王社等残らず回祿した、法華堂は武藏守足利義兼（三河守護たりし足利氏の父）の建立、證菩提院は三河守足利頼氏（義氏の孫）持地院は足利尊氏の建立であつたと。

三回目の建造は後花園天皇の御宇長祿二年^{戊寅}（月日不明）矢作の住徳賢と云ふ人、十方檀那の助縁によりて建てたるものと。内々陣はその後三十七年を経て、百四代後土御門天皇の明應三年^{甲寅}に建立せられた。

本堂外柱はめ板に、京都細川右京大夫内後藤下總守と樂書があり、其他永正大永頃の樂書が多くあつたのを、元文の頃に悉く洗ひ落したと。

江戸時代に至つて、寛延四年（寶曆元年）正月十七日に、本堂の修覆を始め、二月二十七日に上棟した、今の堂宇である。然るに、此際用材として、境内に在りし松檜等の老木樹を惜氣もなく伐採し盡し、爲に

森嚴の靈域の風致を損ずる事甚しかつたと。

惣門即ち仁王門の創立は年代不明であるが、諸堂と共に創建せられたものであらう、仁王尊の作者も不明であるが、應永十七年の焼失後、明應三年の内々陣建立について、門も尊像も再興せられたものと見え、尊像の腹内に左の如き記録が納められてあつた。

現世安穩

作者 宗 梅

三州眞福寺

干時永正拾貳年乙亥吉日

後生善處

願主 賢忠金藏坊

作者の宗梅は如何なる人であらうか。其後二百七十五年を経て、破壊少からざる爲め、寛政元年七月二十五日に門と共に修補した。

本堂鰐口の銘に、大日本東海道參州額田郡眞福寺鰐口成就、永祿元年^{戊午}六月八日奉鑄、大工岡崎蒼生藤原宗次とある。

東谷西谷に僧坊六院あり、金藏坊、大善坊、柳池坊、楞嚴坊、座千坊、淨泉坊、今存するは金藏のみで

ある。本堂の後に、西に大日堂、東に愛染堂がある。

聖徳太子御作と傳ふる阿彌陀佛、運慶作と傳ふる十二神將、作者不明の前立、塑造佛頭三個は甚だ優秀の作である。

本堂の北東に鎮座ある白山宮今は八所神社の例祭に、おし祭とて裸躰となつて神輿を押す奇祭がある。

眞福寺のもとの大善院の境内に、鎌田兵衛尉の墳墓と稱する三個の碑がある。放生池の北を傳うて上り行く左側の山腹に在つて、今、民家に於て祀つて居る。一は兵衛、一はその妻、一は男爲成のであると。大善院第一代の大無房と云ふ人は、鎌田兵衛政家の兄であつた。故にその骸を引取つて葬つたのであると傳へて居る。政家は源義朝に従つて内海の長田忠致に頼り、義朝と共に殺された。政家の妻は忠致の女であつたが、政家の死を悲しみ自殺を遂げ、子の爲成もまた殺されたのである。

附 妙昌寺

大梁山と號し、松平村梁山に在る。曹洞宗。

無外圓昭が始めて梁山に入つて庵を結び、圓昭庵と號し、ついで無著妙融また來り住する事凡そ八年、去つて九州に赴く。無染融了、師の後を慕つてこゝに住庵す。松平初代太郎左衛門親氏深く無染に歸依し、爲に寺を開いて妙昌寺はじめ妙昭寺また妙唱寺と號し、無染を開山とした。妙昌寺記には延文二〇六元年妙昌寺草創とある。されどこの年は無外の梁山に入つて円昭庵を開いたる時をいふので、妙昭寺の創立年代は詳で無い。妙昭寺の建立と同時に、松平村の鬼門に當る宮口村蜂ヶ峯に鹽竈六所明神を勸請した。今の縣社六所神社である。

九月年號を記さざればと恐永祿三年家康當時禁制を下し、慶長八年八月寺領貳拾石の朱印を附した。

親氏の墓境内に在る。當寺に祀る親氏位牌の歿年は、永享九年四月廿日とありて、高月院に云ふ應永元年と比して四十四年の相違がある。なほ青山清藏忠治、その子藤右衛門光長の墓もある。また矢並の鈴木氏の菩提所となつて居る。當寺の傳に、親氏が妙昌寺建立の時、鈴木大和守重勝といへる人が力を盡したる由をしるし、重勝の子重就、重就の子重時、その子重興等の位牌を祀つて居る。

古文書類に

- 一 九月日 藏人元康禁制
- 一 正月日 追禁 慶長十八年正月と傳ふ
- 一 慶長八年八月廿八日朱印狀
- 一 弘治二年五月二日 大給松平親乗の賣券
- 一 慶長十七年三月廿三日 山繪圖裁許狀
- 一 慶長十七子三月廿七日 松平右馬助寄進狀
- 一 慶長十七年卯月廿日 四方境定の證文
- 一 八月三日 板倉伊賀守勝重書狀 元和元年と傳ふ
- 一 六所大明神由緒記 奥書慶長十九年三月 日
- 一 梁山初祖 無外禪師肖像
- 一 徳川家綱いろは掛物 鳩掛物
- 一 梁山古記輯安
- 一 妙昌寺御由緒舊記

貳幅
壹册
壹册

廣濟寺

極樂山と號し西加茂郡石野村大字石下瀬もと東に在る。曹洞宗。

寺傳に謂ふ、嘉慶二年五月、備後三郎兒島高德二〇四八に來つて堂宇を創建し、義清坊志純齋と稱して退隱したるが、武威次第に揚り、遂に八千貫の領地を有し、廣瀬城を築き、之を長男三宅勘解由高盛に讓る云々と。而して高德の法號を廣濟寺殿大泉長廣大居士と稱して居る。高德の事蹟は兎も角として、當寺は廣瀬城主三宅氏の菩提寺であつた。

當寺に祀る位牌に、開基を高德とし、勘解由高盛兵衛佐高基、兵衛胤高、右衛門亮高明、兵衛亮高重、小十郎高宗、小十郎定繼、右衛佐高信、右衛門大夫高貞、攝津守高濤等の名をしるす。これすべて廣瀬の城主であつた事と思はるゝ。

永祿三年二月廿二日兵火に罹る。寺傳には、徳川家康の爲に戦敗し、城郭焦土に歸し、引いて寺門に及び伽藍寶物等都て烏有に歸したりとあれど、二月廿二日は恐く誤であらう。家康は永祿三年五月桶狭間戦後、岡崎城に入るや、直に刈谷城外に戦ひ、軍を返して舉母、梅ヶ坪城を攻撃し、更に廣瀬に攻入る。拂楚坂ふつせ石下瀬の戦はこの時である。かくて更に永祿四年二月に廣瀬攻撃がある。廣瀬城の焼かれたのは永祿三年宇古鼠

五月の時であらう。三宅氏譜には、永祿三年五月に右衛門大夫高貞討死したとある。其後元龜元年に、三宅攝津守高清再興し、父右衛門大夫高貞を開基とした。享保十年十三世月仙潭光の時、現在の伽藍を改築した。境内に古き五輪三基ありて、寺傳には、その中位を高徳の墓と稱し、正平二十年北朝貞治四年五月十三日に歿せりとある。當寺にまた高徳の像なりとて彩色せる木坐像一尺三寸を安置しあり、右工門大夫高貞の像ではなからうか。寶物の主なるものは

兆殿司筆 涅槃像彩色絹地掛物
傳、蘇東波筆 絹畫風竹圖
對敬崇筆絹畫畫雁圖
高徳陣中使用の土瓶

壹幅
〃
貳幅
壹個
等

猿投神社

西加茂郡猿投村大字猿投字本城にあるを本宮、山上東方字茂吉峯にあるを東宮、西方字鷲取にあるを西宮と呼ぶ。

祭神 大碓命 景行天皇 垂仁天皇

社傳に、仲哀天皇の元年八五二勅願によりて大碓命を猿投山下に祠るとある。東宮は成務天皇の御宇。本宮創立に先立つ事六十餘年、二十六座並小の西宮は不詳である。或は云ふ白鳳十三年と。

延喜式に、三河國二十六座並小の内加茂郡七座、狹投神社とある。當社に藏する古文書には、多く猿投宮と_{一五二}しるしてあり、國內神明帳には正一位猿投大明神とある。

文徳天皇の仁壽元年一五二以後、當社が屢々神位を授けられたる事は正史に明である。即ち文徳實錄「文徳天皇仁壽元年十月七日乙巳從五位下」三代實錄「清和天皇貞觀六年二月十九日丙子從五位上」同十二年八月二十八日戊申正五位下」同十八年六月八日癸丑正五位上」元慶元年閏二月二十六日戊戌從四位下」

明治五年五月縣社に列せらる。

建造物は、本社殿、勅額門、勅使殿、拜殿、廻廊、社務所、總門（以上嘉永六年炎上後再建）御輿殿（即堂）

御朱印櫃(石製)鳥居(慶應三年改造)一之鳥居(明治十三年改造)籠堂(大正四年建造)等である。たゞ西宮は嘉永元年の改築にかゝる。維新前には、神宮寺、護摩堂、三重塔、寺院六字あつたが、今は僅にその遺跡を存するのみである。

古は社家社僧があり、社家に別當、檢校等の名があり、多くの神職が奉仕して居つた。また本地垂跡説によりて社頭に神宮寺を建て、阿彌陀如來を安置して本宮の本地佛とし、藥師如來を東宮の、慧世音を西宮の本地佛とし、多くの僧坊があり、總號を猿投山白鳳寺と稱した。社傳に、天武天皇白鳳年中勅願によりて白鳳寺を建立すと。増坊の記録に見ゆるものは、室町時代の文明永正の間に十七院、江戸時代の初期元和正保の間に十三院、中期の延享明和の間に十院、維新前には七院この中一院は燒亡して居つたの名が見えて居る。神領については、往昔の事は明で無一八九九が、その文書に見えたるは四條天皇の延應元年六月十八日の寄進狀を始とし、南北朝の頃から室町時代の初期にわたつて、衣の城主中條氏より度々神田を寄進し(延慶二年三月廿五日、建武四年十一月十五日、文和三年七月廿三日、至徳三年九月十五日、明德四年九月晦日、明德五年五月三日應永四年卯月日、應永四年七月日、應永十七年十一月廿七日等)其後豊臣秀吉の文祿四年九月廿一日に下した

る竹木伐採禁止の朱印狀があり、慶長七年六月十六日に徳川家康は七百七十六石の朱印狀を下した。

實物

一縁起

一卷

一國內神明名帳

一卷

一勅額

(表) 正一位猿投大明神

(裏) 嘉元二年八月一日書之

三河國藤原朝臣朝忠

一兵庫額太刀

長二尺二寸

銘波平行安

(大正八年四月十二日國寶指定)

一尾長鳥造太刀

無銘

(昭和九年五月十八日重要美術品指定)

一太刀

銘長船

禰定

二口

傳曰、八幡太郎義家無楯鎧 (昭和九年五月十八日重要美術品指定)

一 馬面

三個

一 和鏡

四面

一 阿彌陀佛座像 (等身大)

一 軀

神宮寺の本尊たりしもの

一 千手觀音立像 (等身大)

一 軀

本社鬼門に當る觀音堂にありしもの、傳曰行基作

一 古文書

寄進狀其他數多し

一 古書籍

尾張國古圖、白氏文集、本朝文粹、古文孝經、文選、新樂府等を始め、數多の古書籍斷片

當社に藏する國內神名帳は有名のもので、慶安貳年極月下旬俄書之云々の奥書がある。

大碓命御墓

景行天皇の皇子にして小碓命日本武尊の御兄にいらせられ、美濃に封ぜられ、此山中に薨去あらせられたる

由に傳ふ。御墓は猿投村大字猿投字鷲取猿投山西宮にあり、兆域一町三反一畝十五歩、その中央の高き所が

御墓所である。昔から御廟所と呼んで尊敬して居つた。明治八年二月御墓所と確定。周圍に玉垣が築造

せられ、同九年五月に至つて墓掌及び墓丁が置かれ、同十七年十二月に改めて守部一人を置く、事となつた。大正九年五月附近の宮山より出火してこゝに延焼し、域内樹木の大半、及び玉垣の一部が焼失したので、翌年石の玉垣に改築せられた。

天然記念物 菊石

猿投村大字加納字廣澤、廣澤口よりする猿投登山路三軒家の北方の路傍に在る。谷川を越えて西岸にわたり、約七十坪の範圍内に露出して居る。河流中に在るものは球狀が明瞭に認められて、一見菊石の名に背かぬが、然らざるものは表面の風化、及び蘚苔の爲に菊花狀が判然して居らぬ。この球狀花崗岩は、本邦中類例の無い天然記念物である。

昭和十一年三月廿八日印刷
昭和十一年四月三日發行

(定價金參拾五錢)

愛知縣岡崎市六供町字千日四十一番地

發行兼編輯者 中野重義

愛知縣岡崎市八幡町六十八番地

印刷者 久野廣三郎

愛知縣岡崎市八幡町六十八番地

印刷所 久野印刷所

愛知縣岡崎市連尺町八十一番地

發行所 岡崎觀光協會

終



光文畫

